

2023 年度 ジンバブエ研修

2024 年 5 月 17 日

MPJ Youth

2023 年度ジンバブエ研修参加者一同



MPJ Youth



目次

1. ご挨拶～ジンバブエより帰国して～	P.4
2. ジンバブエ基本情報	P.6
3. 研修概要	P.7
4. 会計報告	P.8
5. 研修スケジュール	P.9
6. 活動報告	P.11
6.1 ンビラ儀礼(ンビラ奏者ブーレ氏ご自宅)	P.11
6.2 駐ジンバブエ日本大使館	P.13
6.3 Danhiko Project	P.14
6.4 WFP ハラレ事務所	P.16
6.5 柔道の授業	P.17
6.6 YASD	P.18
6.7 JICA ハラレ事務所	P.20
6.8 The HALO Trust	P.21
6.9 UNFPA ハラレ事務所	P.22
6.10 ジンバブエ大学(学生会議)	P.24
★ ハラレ市内マーケット	P.26
6.11 リンガ村	P.28
6.12 SolidarMed	P.29
6.13 グレートジンバブエ遺跡とカミ遺跡:その歴史と現状(兼本方個人研究)	P.30
6.14 自然史博物館・鉄道博物館	P.34
★サンセットクルーズ	P.36
6.15 ワンゲ国立公園サファリツアー	P.37
★レストラン Boma	P.38
6.16 ヴィクトリアの滝	P.39
6.17 マトボの丘群	P.41
6.18 観光省副大臣との面会	P.42
7. 個人研究	P.44
7.1 ジンバブエの物流インフラ比較研究(朝倉壤司)	P.44
7.2 アフリカにおける日本の活動に関するジンバブエでの考察(今村颯来)	P.47
7.3 「再エネ」とともに考えるジンバブエと鉱物資源循環(榎原茉央)	P.50
7.4 ジンバブエの農業部門における女性のエンパワーメント(齊藤舞)	P.52
7.5 トンゴガラ難民キャンプにおける経済活動と外部との関係(櫻井みさき)	P.55
7.6 ジンバブエの観光産業とそれを取り巻く環境開発・保全の現状と展望(平ひより)	P.58
7.7 ジンバブエの医療支援と一般の意識(田中成美)	P.62
7.8 ジンバブエにおける障害者(筑本普)	P.65
7.9 ンビラ音楽の役割(中山皓聖)	P.67

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.10 ジンバブエでの地域における学校教育の格差について(星野光莉).....	P.70
7.11 ジンバブエ経済と貧困(モー チャーン).....	P.73
7.12 ジンバブエのスポーツ教育(鷺見将太郎).....	P.77
8. おわりに:ジンバブエ研修にまつわる記事のご紹介.....	P.78

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

1. ジンバブエより帰国して

はじめに

本報告書は 2024 年 3 月 1 日から 18 日にかけて実施した MPJ Youth ジンバブエ研修の成果を発信するために制作されたものです。

MPJ Youth(ミレニアム・プロミス・ジャパン ユースの会)は、「アフリカを学び、発信する」をコンセプトに 2009 年度から活動する学生団体です。首都圏を中心とした 10 を超える大学から、100 名以上の学生が文理の垣根を越えて集う日本最大の学生アフリカコミュニティとして、定期的な勉強会やイベント参加、情報交換、交流、HP や SNS での発信等の活動を行なっております。

コロナ禍を経て 3 年ぶりに渡航を再開した去年度のケニア研修に至るまで、MPJ Youth は母団体である SDGs・プロミス・ジャパン(SPJ)が携わるミレニアム・ビレッジ・プロジェクト(MVP)の実施国で研修を行ってまいりました。しかし MVP が一つの区切りを迎えたこともあり、今年度はこれまでの活動の中で渡航経験のない国として、ジンバブエ共和国を研修先を選びました。旅行ガイド『地球の歩き方』の南アフリカ編にはジンバブエのページが存在しません。しかしわずか 10 ページほどに過ぎず、日本人が国内で入手可能なジンバブエの情報は多くありません。現地で活動する日本人の数も限られており、現地の方々と直接やりとりする機会が例年にも増して多い研修となりました。

渡航準備も現地での日々も決して一筋縄ではいきませんでした。参加メンバー 13 名の旺盛な知的好奇心と行動力が、このジンバブエという国で十二分に発揮されたに違いないと私は思っております。以下参加メンバーによる記事が本報告書の大半を占めますが、その内容は緻密かつ多岐に渡り、2024 年時点でのジンバブエを見つめたルポルタージュとして意義あるものが完成したと自負しております。本報告書を通じて、ジンバブエという国について、また MPJ Youth の活動について、関心をお持ちいただけましたら幸いです。ジンバブエに自分も行きたいと思ってくだされば望外の喜びです。

ところでジンバブエ研修に参加した学部 4 年生は研修代表を務めた私 1 人でして、その他は 3 年生 1 名、2 年生 3 名、1 年生 8 名と、MPJ Youth の将来を担う若い世代(私とて社会全体の中では十分若いのですが)が本研修の主力を担いました。今回の経験を糧に、またそれぞれが成し遂げたことに自信をもって、アフリカという大きな大陸とこれからも向き合い続けてほしいと思います。そして日本とアフリカの間により多くの橋を架けてくれるよう、MPJ Youth がその原動力であり続けてくれるよう、願っています。

2023 年度 MPJ Youth ジンバブエ研修
代表 本方暁

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

謝辞

今回のジンバブエ研修は決して我々だけで成立したものではなく、多くの方々のご支援によって実現しました。この場を借りて御礼申し上げます。

まず公益財団法人双日国際交流財団様、公益財団法人三菱UFJ国際財団様には、当研修へのご賛同をいただき、資金面で貴重なご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

山中晋一大使をはじめとする在ジンバブエ日本大使館の皆様、古田成樹支所長をはじめとする JICA ジンバブエ支所の皆様、ノートルダム清心女子大学の松平勇二准教授には、訪問先等をご紹介いただき、また現地の情報をご提供いただくなど非常にお世話になりました。厚く感謝申し上げます。

ジンバブエの方々のご協力も大きな助けとなりました。私どもの依頼を受け入れてくださった訪問先の皆様はもちろんのこと、行程の調整にご協力いただいたエニエル・センデライ氏をはじめとする在日本ジンバブエ大使館の皆様、現地での円滑な研修実施を全日程を通じてサポートしてくださったティナエ・カザンジェ氏をはじめとする Zimbabwe Tourism Authority の皆様、私どもとの懇談の席を設けてくださったトンガイ・ムナンガグワ観光副大臣をはじめとする Ministry of Tourism and Hospitality Industry の皆様に御礼申し上げます。

また平素より MPJ Youth の活動をご支援いただいている認定 NPO 法人 SDGs・プロミス・ジャパンの鈴木りえこ理事長ならびに職員の皆様にも多方面でのご支援をいただきました。感謝申し上げます。

最後になりますが、研修メンバーの保護者の皆様におかれましては、初めてのアフリカ渡航、初めての海外渡航の学生もいる中、2週間以上大学生だけでジンバブエに滞在することについて、ご心配をおかけしたことと申します。至らない点も多くあったかと思いますが、私たちが信頼して送り出し、様々な面でサポートいただき、本当にありがとうございました。渡航を通してかけがえのない経験と学びを得ることができました。

改めて本研修に携わってくださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

2. ジンバブエ基本情報

- ・面積 38.6 万平方キロメートル(日本よりやや大きい)
- ・人口 約 16,320,537 人(2022 年, 世銀)
- ・首都 ハラレ(Harare)
- ・民族 ショナ族、ンデベレ族、白色人種
- ・言語 英語、ショナ語、ンデベレ語
- ・宗教 キリスト教徒、土着の伝統的宗教
- ・政体 共和制(複数政党制)
- ・元首 エマソン・ダンブゾ・ムナンガグワ大統領(Emmerson Dambudzo MNANGAGWA)
2017 年 11 月 24 日就任、2018 年 8 月 26 日再任。(任期:5 年)
- ・議会 二院制
下院:定数 270 名(選挙区選出 210 名、比例代表 60 名)、任期 5 年
上院:定数 80 名(選挙区選出 60 名、伝統的チーフ代表枠 18 名、障害者代表枠 2 名)、任期 5 年
- ・主要産業 (農)たばこ、綿花、園芸
(鉱)プラチナ、クロム、ニッケル、金、ダイヤモンド
(観光)ヴィクトリアの滝やグレートジンバブエ遺跡等、世界遺産 5 か所
- ・総貿易額 輸出:45.99 億ドル
輸入 57.76 億ドル(2021 年, UNCOMTRADE)
- ・主要貿易品目 輸出:貴金属、タバコ、ニッケル、合金鉄等
輸入:石油、自動車、薬剤、無機質・化学・窒素肥料等
- ・需要貿易相手国 輸出:南アフリカ(46.5%)、アラブ首長国連邦(19.3%)
輸入:南アフリカ(42.0%)、シンガポール(19.1%)、中国(8.0%)
- ・GNI 279.1 億米ドル(2022 年, 世銀)
- ・1 人あたり GNI 13,524 米ドル(2022 年, 世銀)
- ・GDP 成長率 6.5%(2022 年, 世銀)
- ・物価上昇率 104.7%(2022 年, 世銀)
- ・通貨 2009 年より複数外貨制が導入され、旧ジンバブエ・ドル(ZWD)の流通は事実上停止。
法定通貨として ZWD を 2019 年 6 月に再導入したが、ハイパーインフレーションでの紙幣不足対応で
2020 年 3 月に米ドルが認められた。研修時は取引の 85%を占める米ドルを使った。(南アランドも見た)
研修後の 2024 年 4 月、新たな通貨としてジンバブエ・ゴールドの導入・ZWD からの交換が発表された。

参照: 外務省各国基礎データ(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/zimbabwe/data.html>)

The World Bank(<https://data.worldbank.org/country/zimbabwe>)

BBC News (<https://www.bbc.com/news/world-africa-68736155>)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

3. 研修概要

MPJ Youth は2009年に活動を開始し、2023年度で15期生をむかえました。定期的な勉強会や、アフリカに携わる方々を招いての講演会や交流会を主な活動としている、「アフリカを学び、発信する」団体です。本研修はMPJ Youth としては14回目のアフリカ研修であり、12回目の渡航を伴う研修になりました。コロナを挟み、渡航ノウハウの継承が困難な期間もありましたが、今回の渡航を通じた知見、人との繋がりを団体内へ還元し、さらに次年度以降に引き継いでいく所存です。約7か月前に開始した事前研修から現地研修までの概要を下に述べます。

【事前研修】

メンバー選考終了後の8月上旬から研修直前の2月まで約7か月間にわたり、事前研修を行った。ジンバブエをフィールドとして、人文系、開発系、政治経済分野と背景も異なるメンバーが各自の興味に応じた個人研究に取り組んだ。おおよそ毎週日曜または月曜にメンバーミーティングを行い、JICA 青年海外協力隊の方々の機関誌や百科事典などを輪読した。個々人の研究についても少人数のグループで意見交換を続け、12月にはMPJ Youth 全体にも向けた研究の中間発表会を行った。渡航直前期はしおりも分担しながら作成し、現地の言語シヨナ語のフレーズ集やアフリカへの渡航に際しての情報共有を行った。

【現地での研修】 開催時期:2024年3月1日(金)～3月18日(月)

ハラレ:3月2日(土)～3月10日(日)

前半の9日間を、首都ハラレで過ごした。国連関連機関や駐ジンバブエ日本大使館・JICAハラレ事務所などのオフィスや、様々な団体の活動地である学校関連施設、ジンバブエ大学等を訪れた。

マシゴ:3月10日(日)～3月12日(火)

ハラレからの道中でリング村に寄りながら訪れた。保健医療団体SolidarMedとグレートジンバブエ遺跡を訪問。

ブラワヨ:3月12日(火)～13日(水)、3月15日(月)～17日(日)

ジンバブエ第2の都市、ブラワヨには、ヴィクトリアフォールズまでの中継地として12日、そして帰国準備のために再度立ち寄った。各種の博物館や歴史ある遺跡が多く残っており、欧州のような美しい街並みだった。

ヴィクトリアフォールズ:3月13日(水)～3月15日(月)

ヴィクトリアの滝やワンゲ国立公園の観光や、各種アクティビティで国内随一の観光都市を堪能した。

参加人数 日本側学生:13名(下表) ※学年は研修参加時のもの

名前	所属大学	学部・学科等	学年
本方 暁(ほんぼう さとる)	東京大学	教養学部国際関係論コース	4年(12期)
榎原 茉央(えばら まひろ)	東京大学	工学部システム創成学科E&Eコース	3年(13期)
朝倉 壤司(あさくら じょうじ)	東京大学	教養学部理科一類(工学部社会基盤学科)	2年(14期)
齋藤 舞(さいとう まい)	上智大学	法学部国際関係法学科	2年(14期)
今村 颯来(いまむら さら)	東京大学	文科三類	1年(15期)
櫻井 みさき(さくらい みさき)	東京外国語大学	国際社会学部アフリカ地域専攻	1年(15期)
平 ひより(たいら ひより)	東京外国語大学	国際社会学部アフリカ地域専攻	1年(15期)
田中 成美(たなか なるみ)	東京大学	理科三類	1年(15期)
筑本 普(ちくもと あまね)	早稲田大学	文化構想学部現代人間論系	2年(15期)
中山 皓聖(なかやま こうせい)	東京大学	理科一類	1年(15期)
星野 光莉(ほしの ひかり)	東京外国語大学	国際社会学部アフリカ地域専攻	1年(15期)
モー チャーン(もー ちゃん)	東京大学	理科一類	1年(15期)
鷲見 将太郎(わしみ しょうたろう)	東京大学	理科一類	1年(15期)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

4. 会計報告

本研修には、公益財団法人三菱 UFJ 国際財団様、及び公益財団法人双日国際交流財団様よりそれぞれ 40 万円、30 万円の助成金を賜りました。改めて深くお礼申し上げます。

助成金は現地での旅費を充当する目的で使用いたしました。全体の収支は下表をご覧ください。

収入		支出	
(公財)三菱 UFJ 国際財団	400,000 円	(航空券代)	(2,757,170 円)
(公財)双日国際交流財団	300,000 円	現地バス代	723,827 円
MPJ Youth 予算	150,000	宿泊費	649,200 円
参加者負担		食費及び雑費	
(—航空券代)	(2,757,170 円)	—国立公園ツアー代	497,886 円
—現地費用徴収金	1,150,090	—訪問先手土産代	21,582 円
		—通行料・駐車代	6,750 円
		—観光名所入場料等	14,250 円
		—食費一部・手数料等	86,595 円
収入合計	2,000,090 円 (※航空券代を除く)	支出合計	2,000,090 (※航空券代を除く)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

5. 研修スケジュール

日時	アクティビティ
3/1(金) 17:00 20:30~	成田空港第一ターミナル南ウイング集合 成田→アディスアベバ
3/2(土) 9:25~	アディスアベバ→ハラレ ゲストハウスチェックイン
3/3(日) 9:00~	ムピラを用いる伝統儀式参加
3/4(月) 9:00~ 14:00~	駐ジンバブエ日本大使館訪問 Danhiko Project 訪問
3/5(火) 12:00~ 15:00~	Hellenic Junior School 柔道授業見学 WFP ハラレ事務所訪問
3/6(水) 10:00~	YASD (Hatcliffe 地区訪問)
3/7(木) 9:00~ 14:00~	JICA ハラレ事務所訪問 The HALO Trust 訪問
3/8(金) 8:00~ 14:00~	UNFPA ハラレ事務所訪問 ジンバブエ大学(学生会議)
3/9(土)	ハラレ市内観光(Zimbabwe Museum of Human Sciences・マーケット)
3/10(日)	リンガ村訪問 ハラレ→マシング間移動
3/11(月) 8:30 PM	SolidarMed 訪問 Kyle Dam Wall、グレートジンバブエ遺跡訪問
3/12(火) AM PM	マシング→ブラワヨ間移動 自然史博物館・鉄道博物館、マーケット訪問
3/13(水) 16:00~	ブラワヨ→ヴィクトリアフォールズ間移動 ザンベジ川サンセットクルーズ
3/14(木) 5:15~	ワンゲ国立公園サファリツアー レストラン BOMA にて夕食・ショー鑑賞

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

3/15(金)	ヘリコプター搭乗・バンジージャンプ、ヴィクトリアの滝見学 ヴィクトリアフォールズ→ブラワヨ間移動
3/16(土)	カミ遺跡訪問 マトポの丘群、セシル・ローズの墓見学
3/17(日) 15:15～ 22:35～	観光副大臣との対談 ブラワヨ→アディスアベバ アディスアベバ→成田
3/18(月) 20:30 頃	成田空港にて解散

6. 活動報告

6.1 インビラ儀礼

東京大学 教養学部 理科一類 1年 中山 皓聖

3月3日にハラレ郊外でのインビラ儀礼を見学した。インビラ職人のサムソン・ブーレさんに協力していただいた。



(左上:インビラ演奏の様子、右上:購入したブーレさんのインビラ、左下:昼食、右下:大根を栽培するブーレさんの庭)

前半はインビラとオシヨによる伝統的な楽曲の演奏を聴いた。インビラ奏者3人、オシヨ1人、手拍子1人、霊媒師1人、踊り子1人という構成だった。彼らによると、それぞれに gifted の才能があり、その才能を活かした役割分担を行っているのだという。歓迎を表すウェルカムソングや、神へのあいさつの曲を聴いた。演奏を聴きながら手拍子や踊りで参加するという伝統的なインビラ音楽のスタイルに参加することができた。またポップスも演奏できるということで、ライオンキングの作中歌を演奏に合わせて歌った。

昼食はブーレさんの奥さんが中心として作ってくださった。ジンバブエの伝統的なサザは、初めて食べたが、餅と白米の良いところをとったような食べ物でとてもおいしかった。また、ブーレさんは日本から持ち帰った大根を庭で栽培していたので、大根の葉もいただいた。手で食べるのは初めてで苦戦したものの完食した。霊媒師は、胃に食べ物が残っていると憑依できないという言い伝えがあるため、酒を飲むことは許されているが、食べ物は何も食べていなかった。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

昼食後、床に莫塵と白い布が敷かれた。ンビラ演奏が再開すると間もなくして、一人のンビラ奏者がシャツを脱いで倒れた。これが、儀礼の開始の合図であった。ンビラ奏者には男性の霊が憑依した。以降の儀礼はすべてシヨナ語で行われ、ブーレさんやンビラ奏者が英語に通訳してくださった。まず、憑依した霊に対して挨拶を行った。その際に、snuffと呼ばれる薬草由来の粉を鼻にいれ、身を清めた。ブーレさんによると、儀礼においては清らかな状態であることが重要でため、月経期の女性は参加できないという決まりもあるという。その後、霊媒師に女性の霊が憑依した。霊媒師は、先祖の霊を介して占いを行ってくださった。あるメンバーには、目が良くなるようにとコメを渡していただき、別のメンバーにはトーテムを教えた後に、アクセサリーを交換した。その後、ジンバブエでの土着宗教についていくつか伺った。人口の9割がキリスト教を信仰しているジンバブエでは、キリスト教徒であっても土着宗教のンビラ儀礼に参加する人もいるということが興味深かった。最後に、ブーレさんの手作りのンビラを購入した。一つだけ含まれる銅の鍵盤は癒しの効果があるということだった。ンビラの役割の様々な側面を意識しながら日本でも練習を続けたい。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.2 駐ジンバブエ日本国大使館

東京大学工学部システム創成学科 E&E コース 3年 榎原茉央

駐ジンバブエの日本大使館の職員チームは、他省庁からの出向も含め様々なバックグラウンドから、専門も異なるメンバーが集まっていっしょに。3/4(月)午前中、日本大使館を訪問し、ジンバブエの概観のレクチャーや研修メンバーそれぞれの興味・関心に沿った質問に答えていただいたが、幅広い分野の示唆に富んだ助言をいただくことができた。

(右:大使館での集合写真)



4時間近くお時間をいただき、在留日本人がジンバブエに約85人(2022年10月時点)しかいないこと、歴史的経緯から特殊な経済を持つこと、自然観光資源の豊富さ、住んでみると人々がとても親切であることなど、マクロ・ミクロ双方の視点で情報提供いただけた。農業が最大の産業で、以前は南部アフリカの食物庫とも言われていたが、現在は輸入も多いという。特に今期は早魃が大打撃を与えているとその後移動や各訪問地でのヒアリングでも伺い、乾燥した平原の様子も実際に目にした。日本の行っている国際協力の概要なども触れていただき、どうしても言語の壁がないとは言えない現地の各所訪問が本格的に始まる前に、基礎情報を丁寧に日本語でインプットでき、理解が大きく進んだ。以前 JICA にお勤めだった山中大使の他、外務省・警視庁・農水省、臨時職員として草の根活動の担当でいらした職員の方が主にお話ししてくださり、決して大人数は有さないが多様性に富む大使館という印象だった。MPJ Youth にはアフリカの国々での駐在員をキャリアの選択肢に入れているメンバーもいる中、様々なロールモデルに会えた。

なお実は、この日は全員で行程を共にすることができていなかった。前日の夕食までは問題なかったが、4日の朝頃から胃腸の痛みや発熱を訴えるメンバーが現れ、3~4名がゲストハウスで休んでいた。職員の方にこの事情をお話した時、大使館に医官という役職があることを知った。医官の方にはその後も、病院の探し方から完治するまでのご助言、怪我の治療のご助言、大使夫人のご厚意で作ってくださった梅干粥を届けて下さるなど、色々な面でお世話になった。職員のうち3名の方が夕食にご同席くださったことも然り、決して大きくはないものの——もしかするとだからこそ——相互に助け合える日本コミュニティがあることを感じた。アフリカを学び、発信することを MPJ Youth では目指しているが、1カ国1カ国、各国内でも無数の全く異なる文化が存在する。等身大の職員の皆さまから伺ったお話は、もしジンバブエで何か活動をしていくとしたら、という解像度を大きく上げてくださった。少しでも実際に近い人の渡航情報があることは、旅行先としてジンバブエを候補に考えている日本の皆さんにとっても安心材料になるだろう。私たち渡航メンバーも、ジンバブエでの日々を色々な方のご厚意を受けて楽しませていただいた者として、この体験を発信していくことを改めて誓った訪問だった。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.3 Danhiko Project

早稲田大学文化構想学部現代人間論系2年 筑本普

3月4日の午後、ダニコ・プロジェクトが運営するダニコ・セカンダリースクールに訪問した。ダニコ・プロジェクトとは、ジンバブエ国内で活動している、障害者支援を目的とする組織である。職業訓練校を設けて障害者の就労支援を行ったり、障害者スポーツを推進したりしている他、日本大使館と連携した活動も行なっている。

今回訪問する機会を得たダニコ・セカンダリースクールは主に身体障害を抱える児童と、そうでない児童とを受け入れている教育施設である。身体障害を抱える児童は、その障害に応じて、例えば聴覚障害がある生徒は特別支援教室のような形で、全て手話で授業を進める一方、車椅子を使用している生徒は教室の前方通路側にスペースを確保してもらえるなど、それぞれが適切な配慮を受けながら学んでいる。

今回の訪問に際し、私たちは理事長にインタビューする機会を得た。そこで、チームを代表し、私を含む三人でジンバブエの障害者及び障害児を取り巻く状況、そしてこの学校での取り組みについて伺った。国内状況で言えば、やはり道路の劣化が激しく、車椅子を使用している人々の移動が阻害されていることなどが挙げられた。一方で、学校の取り組みについて言えば、敷地内に宿舎があり、通学が難しい学生も安心して通学することができること、また現状は身体障害児が主だが、これからは知的障害児や精神障害児の受け入れも行っていきたい意志を見せてくださった。

インタビュー後、特別に授業風景を見学させてもらえるということで、3チームに分かれ、聴覚障害がある生徒が集められた教室、車椅子使用者と健常者がともに授業を受ける教室などを見学した。教室の後ろから見学していると、子どもたちは物珍しそうにしばしばこちらを見ていたが、とても熱心に発言し、授業に参加していた。聴覚障害児の教室では、チームメンバーが手話を教えてもらったと聞いた。授業が終わり、見学していた教室を出ると、下校する子どもたちにあつという間に囲まれてしまった。私たちや私たちの持っているものにとっても興味津々で、キラキラした目でたくさん質問してきた。集まった生徒の中には、特にアフリカで多いと言われるアルビニズムの子どもも何人か見られた他、他の子の車椅子を押してあげている子もいた。学校は楽しいかと聞くと、楽しいという返事が返ってきた。その表情や声色からしても、本当に楽しいのだろう。国際社会で実現が叫ばれるインクルージョンがジンバブエにおいても着実に進んでいることを実感した。



セカンダリースクールの校舎(左)、チームメンバーに集まる子どもたち(右)

参考文献:

「Danhiko project (https://www.pindula.co.zw/Danhiko_project/ - Danhiko Secondary School)」

(最終閲覧日:2024年5月11日)

「Danhiko Project(<https://www.zw.emb-japan.go.jp/inside/images/danhiko.pdf>)」(最終閲覧日:

2024年5月11日)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

「ジンバブエにおける障害者スポーツ普及講習会|SSPORT FOR TOMORROW

(<https://www.sport4tomorrow.jpnsport.go.jp/ジンバブエにおける障がい者スポーツ普及講習会/>)」(最終
閲覧日:2024年5月11日)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.4 WFP ハラレ事務所

上智大学法学部国際関係法学科 2年 齊藤舞

2024年3月5日の午後、国連機関の世界食糧計画(以下、WFP)ジンバブエ事務所を訪問し、JICA ジンバブエ支所の吉田様、ジンバブエ事務所の日本職員の方と現地職員の方々からお話を伺った。訪問内容としては、はじめに会議室にて WFP のプロジェクト概要に関してご説明をいただいた後、WFP のプロジェクトに関連する質問をさせて頂き、事務所内を見学させて頂いた。

WFP はジンバブエにて社会保障の観点から受益者に現金支給やまた、貧困削減やレジリエンス強化のために生計向上のための支援を実施しており、都市部であるハラレ市内でも事業実施地域がある。またそれに限定することなく、気候変動の影響による食料安全保障の状況やそれに対する対策に関してのお話しをお伺いした。

質問の際に、2021年にWFPとデンマークのDan church Aidがハラレで女性農民の自立を支援する活動として、現金での支援金給付によるキノコ農場の設立した事例について伺った。作物として、キノコを選択した理由として、キノコ栽培が体力的な労働を伴わないこと、広大な土地を使用せずに栽培が可能であること、そして、キノコが約3ヶ月周期で収穫が可能であるため、常時的な収入源が見込まれること、それに付け加え、キノコ自体の栄養素の高さが評価されたことであった。このように収入源と栄養素の獲得がジンバブエの女性たちの農業の可能性を拡大させた。そして、現在キノコのみに限ることなく、ピーナッツもそれらの条件を充たしており、ピーナッツでの事業も拡大されている。資金的援助を持続させるのではなく、ノウハウや施設の提供により、常時的な自立への支援を実施している。

そして自己の事前学習内容では、女性は土地へのアクセスが伝統的慣習法により制限されているとまとめていたが、実際 WFP の専門家の方にお話を伺ったところ、現状としては、都市部では女性は比較的土地に対してアクセスできるように変化しているという。しかし、農村部ではいまだに伝統的慣習法により女性が土地にアクセスすることを制限されている場合もあるという。このことから、ある一定の視点から物事を捉えるのではなく、多角的な視点が必要になってくると学んだ。前提となる基礎事実の部分で最新のデータとして、女性が土地を持てるように変化してきているのは、政府の支援とWFPをはじめとした組織・団体の支援が進行している現状にあると考えられる。弊団体数名からの質問が終了した後、事務所の見学をさせて頂いた。仕事環境は非常にリラックスできるような空間であり、SDGsの文言やWFPのプロジェクトに関する展示がされていた。

WFP事務所訪問を通じて、ジンバブエにおけるWFPの活動の理解を深めるとともに、人々に対する食糧支援を持続的に実施するというWFPの理念が学べ、これは国際協力組織におけるどの活動でも必要とされている部分であると感じた。WFP事務所への訪問の実現を可能にさせていただくに協力していただいた方々に感謝を申し上げたい。



WFP の事務所内での写真

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.5 ジンバブエの柔道

東京大学教養学部理科二類1年 鷲見将太郎

2024年3月にジンバブエに渡航することが決まった時、私は日本文化がどれくらい普及しているのか？ということについて興味を持っていた。私が自身の大学にて剣道部という空手と体操が混ざったような武道に所属しているため、特に武道の普及について興味を持ち、調べると日本大使館から柔道着100着を寄付したことを見つけたため、日本大使館に問い合わせ、スマート・デケ・ジンバブエ柔道協会会長に取り次いでもらうことができた。

3月5日の午前中、私立の学校の敷地内にある柔道場を訪問し、柔道のクラスを見学させて頂いた。柔道の師範であるスマート・デケ・ジンバブエ柔道協会会長による稽古に学校の5、6歳の子供たち約12名と弊社からのメンバーの一人が参加した。柔道場というよりは、一つの大きな部屋にそこにクッション性のマットを敷いていた。大半の子供たちはジンバブエの出身ではなく、海外からの移住者の子供であった。まず、準備運動から軽く入った。その際に、「一、二、三」といった日本語で掛け声をかけていた。それだけではなく、受け身、前転の動きをする際にも日本語で「前転、受け身、大外刈り」というように声を掛けており、日本の武道という部分を非常に重んじてお教えになられているのが伝わった。また、子供たちが集中力を切らしているときにはスマート・デケ師範は集中するように注意をし、子供たちが遊ばないように気を遣っていた。全体的に子供たちは非常に積極的に参加をしており、楽しそうな様子であった。準備段階が終わり、本格的に柔道の稽古に入ると見取りとして、子供を一人代表者として呼び、体格差に関係なく柔道は相手と戦うことが可能であるということを見せており、弊社からの参加メンバーも小さな子供に倒されている様子があった。また最後には、スマート・デケ師範と子供たちが一人ずつ試合をした。子供たちが非常に楽しそうに真剣に柔道を行っているのが印象的であった。

最後にスマート・ダンケ師範に幾つか質問をお伺いした。スマート・ダンケ師範は柔道に対する興味から柔道は10代後半から始め、物理的に道場が非常に遠くあったが、柔道の魅力に魅了されて苦勞をしながら道場に通ったという。そして、現在はジンバブエ柔道協会会長として、柔道を普及させる活動を実施している。令和5年2月15日に「スポーツ外交推進事業」として、公益団法人講道館の協力の下、公益財団法人全日本柔道連盟から柔道着100着の寄贈を受けた。この事業は、経済的に道着が購入できない人々に対しても柔道を始めるきっかけとなったという。また、柔道を通して、生徒たちに伝えたいこととして、護身術として自身の身を守る技術を身につけるだけでなく、柔道の礼儀の部分の学んでほしいということ述べていた。礼儀を重んじる日本の文化を大事にしている部分に日本生まれの柔道をありのままの姿で伝えようとしているのを感じた。



(写真:練習している道場の様子)

【参考文献】

ジンバブエへの柔道着の提供 | 外務省 (mofa.go.jp)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.6 Young Achievement Sports for Development(YASD)

東京大学前期教養学部理科一類1年 モーチャーン

3月6日、かねてからメールでやり取りしていたジンバブエのNPO、YASD(Young Achievement Sports for Development)の事務所を訪問し、さらにはプロジェクトを実際に行っている Hatcliffe 地区の小学校の視察と貧困地区の方のお話を聞くという大変貴重な機会を頂いた。

YASD はもともと 2005 年に発足した NPO で、日本政府はじめいろいろな国や団体から資金援助を受けて活動している。JICA が資金協力をしている関係で、JICA ジンバブエ支所長の古田さん、JICA スタッフの Charlotte さんに入ってもらって連絡を取るための助けを頂き、YASD の国際協力・渉外部門の Joe さんに非常に丁寧に対応してもらうことで、ほぼ終日にわたる充実した経験を得ることが出来た。古田さん、Charlotte さん、Joe さんをはじめとする YASD スタッフの皆さんにはこの場を借りて感謝したい。

まず、ハラレのダウンタウンにある YASD 事務所を訪れて、YASD のスタッフの皆さんと自己紹介を行った後に、YASD の活動についての軽い紹介と今日のプログラムで研修メンバーが見たい事柄について確認していただいた。YASD が 2005 年に発足したこと、サッカーをはじめスポーツを通じて貧困地区の子供たちの教育問題に取り組んでいることなどを学んだ。また、我々がジンバブエの現地の人々と交流し、話を直接聞きたいという要望にも応えて頂き、この後の視察に反映して頂いた。



(左:YASD 事務所でのお話の様子。右:YASD 事務所での集合写真。)

YASD 事務所を後にし、我々の車と YASD の車の 2 台に分かれて Hatcliffe 地区まで移動した。我々の車に、道を案内するために 1 人 YASD のスタッフの方が乗っていた関係で僕が 1 人だけ YASD の車にスタッフとともに乗り込んだ。YASD の車は我々の車と違い、車の荷台にぎゅうぎゅう詰めになったり、エアコンがつかないのでとても暑かったりして、ハラレの現地の人々の生活に入り込めたようで非常にうれしかった。また、YASD のスタッフとも車の中でいろいろな話をして仲良くなれて、自分にとって貴重な経験になった。

Hatcliffe 地区ではまず学校と女性の就労支援施設を訪問した。貧困地区にある、ジンバブエでは一般的なスタイルの学校だったので、3月4日に訪問したハラレ市内の白人向けの私立の学校と比べて、先生一人で 100 人ほどの生徒を教えていたり、教室がレンガでできたくらい部屋だったりして、教育環境の差からジンバブエの貧富の格差を感じた。その後は生徒たちと触れ合う時間を取ることが出来た。女性の就労支援施設ではミシンの使い方を教える建物を視察したほか、YASD の方から女性研修メンバーにその施設で作られた洗える生理用品を頂いた。昼食は付近の家の庭でお腹一杯になるまでサザとジンバブエの一般的な伝統料理を頂いた。



(左、中央:研修メンバーが学校の生徒と触れ合う様子。右:昼食を頂く様子。)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

昼食を頂いたのち、少し車で移動して、Hatcliffe 地区の中でもっと生活が苦しい地域に移動し、家の中を見せて頂いたり、生活について直接お話を伺う時間を頂いた。ハラレでの様々な訪問先でのヒアリングではこのように貧しい生活を送っている方々に直接お話を伺う機会はなかったため、研修メンバーにとっても、貧困と格差や人の移動についての研究テーマを持っている自分にとっても、今回のジンバブエ研修の中でも特別な時間だったように思われる。



(貧困地区の方から直接話を伺う様子。)

その後、再び YASD の事務所に戻って一日の感想や感謝を伝え、YASD の事務所を後にした。繰り返しになるが、ジンバブエの人々の日常や、ジンバブエの貧困の現実を自分の目で直接見ることが出来たという点で、ジンバブエ研修の中でもとりわけジンバブエに対する解像度が上がった一日になったような気がする。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.7 JICA ハラレ事務所

東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻2年 星野光莉

JICA のジンバブエ事務所に赴き、協力隊の方々からお話を伺った。ジンバブエで JICA が力を入れている取り組みは主に3つあるという。南部アフリカ地域の経済統合の促進、資源の有効活用、貧困に苦しむ人々への安全保障のための支援である。

具体的な取り組みとしてまず一つ目の南部アフリカ地域の経済統合の促進という面においては、国境での手続き時間が長いという現状の課題を受けて、ザンビア、南ア、ジンバブエで国境の手続きを統一化し、ヒト、モノ、資源、エネルギーのやり取りをよりスムーズにしていこうとしている。

二つ目の資源の有効活用という面では、農業の開発に力を入れていた。もともと農業分野におけるポテンシャルは高いジンバブエだが、大半を占める小規模農家の貧困が問題となっていた。彼らは市場における需要と供給をきちんと認識できていなかったため、JICA は市場調査を重視して取り組みを進めたという。また現在ジンバブエは米を他国から輸入している状態だが、国内でも米を生産するために JICA が独自に開発したネリカ米の普及も進めていた。さらに、人的資材の有効活用という面では、ジンバブエには人材があるにもかかわらず国内に仕事がないために、国外に人が流出してしまっているという現状があるため、投資環境を改善し、国内のスタートアップ企業を支援しているという。

最後に貧困に苦しむ人々への安全保障のための支援についてだが、JICA から事業を委託されているコンサルタントの宮本さんに詳しくお話を伺うことができた。宮本さんはジンバブエにおいて5S-Kaizen-TQM 手法による医療サービスの質向上プロジェクトを行っていた。医療の質とは個々人の生活の質に直結するものである。医療の質を向上させると聞いたとき、多くの人が高度な医療知識や技術が必要なのではと考えるだろう。しかしジンバブエにおける医療の本質的問題を見極めると、その解決に医療知識や技術はまったく必要ないのだという。なぜなら、ジンバブエではそもそも病院において器具がきちんと整理整頓されておらず、在庫管理が不十分であったり、患者が病院の外で診療を待たなければならなかったりといった、非常に初歩的で根本的な課題が多く存在するからである。そこで宮本さんは5S(整理、整頓、清掃、清潔、しつけ)により職場環境の整備を行い、その後事実や情報に基づく問題解決を実行(KAIZEN)、最後に全組織活動により、患者・家族・コミュニティに価値を生むサービスの提供につながる(TQM)という一連のプロジェクトを開始したのである。このプロジェクトを実施した病院では病院・職場環境に大幅な改善がみられ、効率性の向上につながったという。まだまだ、最終的な患者の生活の質を向上させる医療の提供というゴールには至っていないというが、私は医療知識や技術がなくとも、問題は解決できる、むしろ医療現場であるということが問題の本質を見えなくしていたのだという可能性に気づくことができたのは大きな成果であり、非常に重要な視座ではないかと感じた。



◀ JICA の方にお話を伺う様子

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.8 The HALO Trust(ヘイロートラスト)

東京大学前期教養学部文科三類 1 年 今村颯来

3月7日午後、ハラレ郊外にある the HALO Trust の事務所を訪問した。



訪問の流れとしては、まず我々を出迎えてくれた Misja さんの案内のもと事務所内を見学させていただいた。そして地雷の基礎的な知識、世界における現状や具体的な団体の活動内容について説明を受けたのち、我々の疑問等を話し合うセッションが行われた。

事務所内には、地雷の分布や資金の提供元等についてのポスターや、まさに地雷除去活動を行っている最中の写真等が数多く飾ってあった。日本政府は当事務所に多額の資金提供をしているため、防護服の胸元や、パートナーについての掲示物等様々なものに日の丸があしらわれており、目に留まった。職員たちは 3 週間を地雷除去キャンプでの活動、1 週間を休暇とするスパンで活動しており、訪問した日はそれぞれが担当地域に出発した当日であったため事務所内は閑散とし、業務用の重機もほとんどが出払っていた。

HALO は、2013 年からジンバブエでの活動を開始し、担当地域における地雷除去を 2025 年に完了することを目標としている。除去活動は一見非常に危険なものに思えるが、適切な手順を踏めば重大な事故はほとんど起こらないため、職員の安全性は確保されているそうだ。地雷除去に携わる職員のうち 9 割が現地住民であり雇用の創出に貢献しているほか、活動完了後を見据えた職業訓練も行うなど、手厚い対策をしている。また、地雷の正しい知識と初級英語文法を組み合わせた教科書を配布し、教育の観点からも地域住民に利のある取り組みを行っているそうだ。

セッションでは実物大の地雷模型や、本物の防護服も見せていただいた。日本で生活していると、地雷の存在 w 実感することは非常に難しい。訪問を快諾してくださった Micheni 氏、温かく出迎えてくださった Misja 氏筆頭に、このような貴重な体験ができたことを改めて感謝申し上げたい。



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.9 UNFPA ハラレ事務所

東京大学理科三類1年 田中成美

UNFPA とは国連人口基金のことである。始めにハラレの事務所にかがいがい、ジンバブエの医療課題と行っている活動について聞いたあと、バスで移動して国立家族計画会議の本部に行き、家族計画について政府とコラボレーションしている事業について聞いた。そして、最後に近くにある婦人科クリニックへ行き、実際の治療室などを見せていただいた。

ジンバブエの女性のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス(以下 SRH)に関する課題について軽く紹介する。まず、妊産婦死亡率が高く、死亡率は 0.362% である。ほとんどの妊婦は出産時に公立病院へ行くが、薬不足や不衛生な環境のため、死亡率が高くなっている。元々ハイパーインフレなどで政府の収入が減り、保健分野の予算が減っていたが、ここ数年ではサイクロン・イダイ、COVID19、医療従事者の国外流出によりさらに医療システムが弱体化している。青年の失業率は 45% で、15~49 歳で HIV に感染している確率は約 12%、ジェンダーに基づく暴力(GBV)なども頻繁に起きている。特に女性の立場が伝統的に弱く、男性のアプローチを断りづらかったり、そもそも避妊に関する十分な知識が欠如したりしているケースが多い。

この対策として、UNFPA が「保健と子供の健康」省と協力してジンバブエで行っていることは主に 4 つある。1 つ目は、必要最低限の SRH 関連の支援を受けられる MISP と呼ばれる物を用意している。サイクロンや感染症流行などの緊急事態では病院へ行けなかったりして十分な助けを得られない女性が増えている。そのような事態に備えて、MISP という必要最低限の物資が入っているパッケージを渡したり、統計などのデータを集めて国の状態を把握したりしている。2 つ目は、家族計画についてで、避妊薬の普及に力を入れている。3 つ目は統計データをとることである。各種の感染率や人口に関する統計は現在の課題や過去との比較に使われる非常に重要な資料である。4 つ目は地方にまで活動を普及させることである。地方ではそのような物を手に入れにくいので、地域に根ざした施設を開設したり、CBD(Community Based Distributors)というローカルな人員を配置したり、ピア・エデュケーターという青少年と同じ世代の啓発する人員を使ったり、西洋医学に対して否定的な保守的なコミュニティでは、そのリーダー格を説得することに注力したり、などで対応している。

MoHCC で聞いた家族計画について。家族計画はジンバブエの病院では中絶はレイプや妊婦の命が危険にさらされている時以外は許可されていない。出産の時にかかる費用は、入院も含めて無料だが、薬代は自己負担になるそうだ。

その後、家族計画会議の運営している婦人科クリニック、スピルハウスクリニックまで移動し、実際にクリニックの中を見学させてもらった。ここでは家族計画に関する相談や、性行為によって感染する病気の治療、子宮頸がんや HIV の診断を行っている。子宮頸がんは女性のがんの中で 30% を占めるので、大切な治療だ。中に入ってみた所、平日の昼だったため患者さんは 5 人ほどしかおらず、医者も 2、3 人しかいなかった。午前中の方がもっと患者さんが来るという話だった。施設や装置は古いが、清潔そうだった。診察室と処置室が分かれており、患者は診察されてからベッドや器具がある処置室へ案内されるそうだ。服を殺菌洗浄する洗濯機もあった。印象的だったのは、USAID のロゴが入っている段ボール箱の中に大量の女性男性用のコンドームが入っていたことである。ジンバブエではコンドームを無料で配っており、その点に関して日本より進んでいると感じた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

総じてジンバブエでは病院でかかる費用が無料だったり、入院費が免除されたりと、かなり利用者に優しい制度になっていると感じた。ただ、収入の少ない人にとっては薬代を払うのが難しかったり、そもそも都市部から離れていて適切な機器のそろった病院にアクセスできなかつたりするのが課題だと感じた。また、中絶の許容範囲が日本より狭く、性被害にあっている女性がいる現状ではもっと範囲を広げても良いと思う。

最後になりますが、この貴重な訪問の機会を設けてくださったアビゲイル様、エドウィン様、古田様、各種の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

スピルハウスクリニックの洗濯室



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.10 ジンバブエ大学(学生会議)

東京外国語大学 国際社会学部 アフリカ地域専攻 1年 櫻井みさき

2024年3月8日午後、ジンバブエ大学の学生と学生会議を行った。参加したのは、研修メンバー13名とジンバブエ大学の学生約20名。この報告書では学生会議の内容に沿って、①日本文化体験 ②ジンバブエ学生によるムビラ演奏 ③ディスカッションの3つのパートに分けて活動を報告する。学生会議に当たって、参加してくれたジンバブエ大学の学生たちと、この企画を主導してくれたペミワ・パナシ氏に感謝の意を表する。

① 日本文化体験

両学生のアイスブレイクのために日本文化体験を行った。日本学生が伝統的なおもちゃであるけん玉、だるま落とし、折り紙などを持ち込みジンバブエ大学の学生に体験してもらった。

・けん玉

私が見る限りでは、けん玉が一番盛り上がっていた印象である。最初はフォームも知らない状況で、大皿に乗せることもできない様子だった。しかし、日本人学生が持ち方や体の使い方を説明するとすぐに習得し、けん玉に挑戦したほとんどの学生が大皿に乗せられるようになっていた。中にはジンバブエ学生同士でフォームなどを教えあう様子も見られた。

・折り紙

ほぼ全員が男子学生であったこともあり、手先の器用さが試される折り紙には苦戦している学様子だった。それでも、器用な生徒は鶴やティラノサウルスを完成させていて、折り紙を楽しんでいた。

その他にも、日本とジンバブエで流行っている音楽やアニメの話題で盛り上がるなど、双方とも文化交流によってすぐに打ち解けている印象であった。やはり、日本のアニメは世界共通で、ジンバブエ学生の中でも日本のアニメが好きな学生はたくさんいた。

② ジンバブエ学生によるムビラ演奏

日本メンバーの一人がムビラ音楽を研究テーマとしていたことがあり急遽、ジンバブエ学生の一人がムビラの演奏を見せてくれた。手拍子の仕方や、掛け声なども教えてくれ、一体感が生まれた良い機会だった。事前に儀礼としてムビラを演奏する様子は見ていたものの、学生が演奏する様子を見るのは初めてだったため、ムビラが若い世代にも浸透していることが感じられた。



けん玉で遊ぶ様子



ムビラを披露している様子

③ ディスカッション

・それぞれの大学で勉強していることについて

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

初めに、それぞれ大学で勉強していることについて話してもらった。参加したジンバブエ学生のほとんどが工学部に所属していることから、大学で工学を学ぶ日本人学生とは白熱した議論が飛び交っていた。国が違うとはいえ、お互いが学んでいること、考えていることレベルは変わらず、お互いに感心している様子だった。また、日本人学生は自身の研究テーマについてジンバブエ学生に話を聞いていて、観光や経済の話などでも有意義な情報を得られていたというように感じる。

・日本とジンバブエの関係について

最後に日本とジンバブエの関係について議論してもらった。ジンバブエから見た、日本のイメージは、アニメや車といったことが挙げられた。逆に日本から見たジンバブエのイメージは教科書で見るグレートジンバブエや、モノタパ王国のことが挙げられた。そのことを話すと、ジンバブエ学生はとても喜んでいて、特に、日本から見たジンバブエのイメージはあまり浸透せず、日本からの観光客も少ないのが現状だ。昔のジンバブエの悪いイメージを払しょくし、新しい・良いイメージをもたらすことが大切であると思う。

ジンバブエ研修において、機関やそのことに関する専門家からお話を聞く機会があったが、現地の特に自分たちと同じ世代の学生と話す機会はこれまでになかったため、とても有意義な時間になった。国は違えど、学問への姿勢や学べる点はたくさんあり、お互いに刺激をもらえる時間になったと思う。中には日本に留学したいと考えているジンバブエの学生もいて、ここでつながった縁がまた違う形で発展することも期待できそうだ。



ディスカッションの様子



最後に全員で集合写真

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

★ ハラレ市内マーケット～ジンバブエでの買い物～

東京大学教養学部理科二類1年 鷲見将太郎

2024年3月にMPJ youthの研修参加者達はジンバブエへ行った。全18日間の行程の中で前半はジンバブエの首都・ハラレに、後半はマシゴやブラワヨ、ビクトリアフォールズへ行った。我々は日々の食事のために“Pick'n pay”, “OK mart”, “Chicken In”, “Pizza In”, “KFC”へ、お土産のためにハラレ最終日“Avondale Flea Market”というマーケットへ行った。それぞれについて記していきたい。

1 スーパーマーケット全般

基本的に日本とそこまで変わらない物価である。パンやフルーツは日本と比べて安い。水は600mlで40円くらいの値段であるが、まとめ買い用のポンプもあった。支払いは現金だと基本米ドルを用いた。セント硬貨が流通していないため、我々はキリのいい数値ギリギリまで買って調整する必要があった。それでも、何セントか余ってしまうと、1個4セントのガムをお釣りで代わりとしてもらった(筆者はそのガムを何十個も持って帰国したのだが...その行方は言うまでも無い)。ドル札はボロボロになっても新札に交換されていないため、全ての紙幣が茶色くボロボロになって、今にも破れそうになっている紙幣を使い続けていた(通称ボロ雑巾)。100ドル札などの高額紙幣は受け取ってもらえる場所が限られた。クレジットカードでも支払うことができたが、1店舗に1つしか機械がなく、その機会はその店舗で偉い人しか使用することができないため支払いに時間がかかった。

1.1 OK mart

日本のOK martと全く同じ名前ではあるが、日本のOK martとは全く別物と思われる。若干他のスーパーマーケットより物価が高い。

1.2 Pick'n pay

ジンバブエドル、米ドル、ランド(南アフリカの通貨)のレートが書いてあるスーパーマーケットである。ハラレではランドを目にする機会はなかったが、より南アフリカに近いブラワヨ、マシゴでは見かけるようになった。初日、1ドル16500ジンバブエドル。最終日、1ドル20020ジンバブエドル。4月の初めには1ドル30000超ジンバブエドルに達したようだ。

1.3 Chicken In, Pizza In, Cream In

ジンバブエに本社があるファストフード店である。ケニアにも進出しているようだ。日本で言うとセブンイレブン並みに出店している。Chicken In, Pizza In, Cream Inはセットで出店していることが多い。Chicken Inのバーガーとポテトは本当に美味しい。ジンバブエに行ったら、まず食べたい一品。

1.4 ケンタッキー

日本と同じくらいの値段であった。ちょっと日本よりはスパイシーか？

1.5 Avondale Flea Market

このマーケットは僕らがハラレに滞在した最後の日に訪れたマーケットだった。見た感じ、サッカーコート半分くらいの広さに4つの真っ直ぐな道が引かれていて(もちろん舗装されていない)、その両側にテントを屋根とした商店が立ち並んでいた。そこでは様々なものが売られていて、服やサングラス、バッグなど日常生活

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

活に必要なものから、古本やスイッチ、PS4などの文化的なもの、そして、旧ジンバブエドルやワイヤーで作った芸術品などのお土産ものまで様々なものが売られていた。後から振り返ってもここでしか実用的なお土産は買えなかったと思う。安全のために、3人以上での団体行動をしていた。現地の商人の人々とは英語で話していた。マーケットを回る時間を終えると、メンバーはみんな思い思いの格好をしていた。言い値の5分の2までは値切れる可能性があった。

そこでの物価を覚えている限り記す

バッグ:4ドル

ネックレス:2.5ドル

ブレスレット:2.5ドル

サングラス:5ドル

帽子:10ドル

Nintendo Switch:350ドル

ペン:2ドル

木で作った皿:5ドル

旧ジンバブエドル(偽札?):0.5ドル

謎のお面:10ドル

2 お土産の物価は既に記載したが、ここでは様々な日用品の物価を記したい。

水(600ml):25セント

ジュース(7upなど):50セント

ビール:0.6ドル

大きいハンバーガーのようなバンズ3つ:80セント

マスカット一房:2.5ドル

固形石鹸:1ドル

なんちゃって乾麺:1.5ドル

輸入品のシャンプーやポテトチップスなどは同じものでも日本の4倍くらい

乳製品は高めであった。



(左:マーケットの雰囲気、右:旧ジンバブエドルが売られている様子)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.11 リンガ村

東京大学 教養学部 理科一類 1年 中山 皓聖

3月10日はハラレからマシングへ移動した。その道中、ハラレから50kmほど離れたリンガ村に立ち寄った。リンガ村はンビラ職人のサムソン・ブーレさんの故郷である。

リンガ村はハラレとマシングをつなぐA4という道路を外れたところにある。A4を外れると、牛やヤギといった家畜が広々と放牧されていた。リンガ村の建物はレンガを土で覆った壁に、日本の「茅葺」のような草木の屋根を持つ構造をしている。屋内は室外の気温と比べてかなり涼しかった。ブーレさんのご自宅では昼食づくりを見学させていただいた。ジンバブエの伝統的な主食であるサザは、メイズを粉末にしたミリミールという粉に水を加えて、加熱しながら混ぜ続けることで完成する。サザを混ぜる過程を体験させていただいたところ、想像より重く、かき混ぜるのが大変だった。ご自宅の周りでは、様々な作物が栽培されていた。主食のもとになるメイズはもちろん、きゅうりや落花生、サボテンといった植物もあった。とくに、きゅうりは日本のきゅうりと異なり、アボカドのような形に長めのとげがついた形状をしており、味も日本のものより酸味が強かった。また、家畜として飼っている鶏も庭中を歩き回っていた。電気やガスは通っていないものの携帯電話の充電のためにソーラーパネルを使用していた。もっとも、ジンバブエでは停電が多いため、リンガ村に限らずソーラーパネルがよく用いられており、ジンバブエでの滞在中に何度も見かけたことが印象的だった。水は井戸から手動でくみ上げたものを使用していた。井戸はかなり深いためくみあげるだけでも重労働であると感じた。玄関前の木陰では、ブーレさんと同じくンビラ職人であるブーレさんの息子さんたちがンビラの演奏を披露してくださった。ンビラ儀式のときとは異なり、交流や憩いの場を生み出すという目的のンビラ演奏の一面も観察することができた。



(左上:リンガ村の様子、右上:昼食の様子、左下:昼食の調理、右下:ンビラを演奏するブーレさんの息子さんたち)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.12 SolidarMed

東京大学理科三類1年 田中成美

SolidarMed は複数国にまたがる医療系の NGO 法人である。マシゴにある事務所へ行き、活動について説明を聞いた後、自分たちと同年代の青少年に対してドラッグの危険性を啓発する活動を行っている Peer Advisor Board Members と面会した。

SolidarMed は 3 つの活動が軸になっていて、1 つ目は青少年の健康プログラム、2 つ目は HIV や破傷風などの感染症対策、3 つ目は高血圧や糖尿病などの非感染症(NCDs)への対処、4 つ目がメンタル・ヘルスプロジェクトである。1 つ目は 10 から 19 歳の青少年を対象に、他の同年代の人に会わずにヘルスケア施設にアクセスできるように 10 の施設で「セーフ・プレイス」を作っている。実際に利用している人としては、若年出産をした母親や、HIV に感染した若者である。2 つ目と 4 つ目はコラボレーションしており、HIV に感染した人の精神的な健康のサポートを行っているし、その逆もまたしかりである。目標はうつ病や不安を抱えている患者の治療である。3 つ目は、非感染症の検査をする所から始まる。糖尿病や高血圧が見つかったらより深刻な病気に発展しないよう管理される。

次に行ったピア・アドバイザーとの面会で聞いた、印象的な話をいくつか挙げる。

彼らの中には元ドラッグ使用者も混じっていて、それがアドバイザーになったきっかけだったと言う。自分が大変な経験をしたから、他人のために自分の経験を活かしたいと話していた。自分の苦しんだ経験を共有し他のために役立てる志に感心した。

ドラッグの危険性を分かっていない人が多いのかどうか聞いてみた所、ほとんどの人はドラッグの危険性を理解しているようだ。だが、ドラッグをやらないと仲間はずれになるケースや、カッコいいと思っているケースがあるため、なかなか根絶は難しいらしい。さらには、ジェンダーのステレオタイプによるプレッシャーで、悩み事を誰にも共有できずドラッグに走る男性もいるようだ。そうすると、ハイになった状態では避妊せずに性行為をしてしまうことが多い。

また彼らはアドバイザーの任期が終わった後も、啓発の活動を続けたいと話していて、地元の青少年の健康を良くしていきたいという意欲を感じた。

さらに政府にやって欲しいことを聞いてみたら、もっとドラッグ中毒者のためのリハビリ施設が欲しい・アドバイザーを育成する施設がもっと欲しい・マリアナの量によっては摂取することが合法なので、それを違法にして欲しいなどの意見が上がった。

この訪問で感じたことは、ただ物資を増やしたり、医療従事者を教育したりするだけではなく、社会全体の考え方から変えていかなければならないことだった。そのため、学校では性教育とドラッグの危険性についての授業を必修にすることが良いと思った。ピア・アドバイザーの方々が目を輝かせて将来について話していたことも印象的だった。みんなが自分のコミュニティを良くしていこうという意欲にあふれていて、すごく元気づけられる訪問だった。



SolidarMed のピア・アドバイザーとの交流

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.13 グレートジンバブエ遺跡とカミ遺跡:その歴史と現状

東京大学教養学部教養学科総合社会科学分科
国際関係論コース 4年 本方暁

グレートジンバブエとカミの両遺跡はジンバブエを代表する史跡で、世界文化遺産に登録されている。本節では2つの遺跡の歴史と現状についてレポートする。なお歴史についての記述は主に吉國(1999)に依拠するが、適宜現地ガイドさんの話も織り交ぜる。

1. グレートジンバブエ遺跡

1980年に白人少数政権のローデシアを打倒した新生国家はジンバブエ共和国を名乗った。本遺跡はジンバブエでもっとも有名な遺跡であるどころか、まさしくジンバブエという国を象徴する存在である。

11世紀中頃、現在の南アフリカ共和国北端にあたるリンポポ川のほとりに、ショナ人の集団がマプングブウェ国を建てた。周辺で産出される金を交易し、身分の序列を住む場所の高さで表現し、円形の石積みの住居すなわちzimbabwe(ショナ語で「石の家」)を建てる、ジンバブエ文化の基本的なモチーフはこの段階で出揃った。石の家の遺跡はジンバブエ国内を中心に200余りが知られているが、その中で最大のものが13世紀ごろマプングブウェ国を凌駕し14世紀に最盛期を迎えたグレートジンバブエの遺跡である。

最盛期のグレートジンバブエには18,000あまりの人が住んだ。元来人口過少で社会が分散を志向したアフリカにおいて、これは超集中的といえる。支配者の権力の源は交易支配と牛の保有を背景とした莫大な富である。金や象牙を輸出した一方で多くの外来品がもたらされ、スワヒリ文化圏のキルワの金貨や中国明代の陶磁器などが発見されている。グレートジンバブエの住民はこの富の再分配システムに参加しつつも、基本的には農業で生計を立てる「都市の農民」たちであった。後代のショナ語文化圏は周辺地域の中では例外的といってよいほど広く、しかも石の家遺跡の分布とほぼ重なっているため、グレートジンバブエの下で社会の統合が進んだと考えられる。

遺物の年代測定からして、グレートジンバブエは1500年頃には衰退していた。活発な農業と人口集中により周辺の環境への負荷が限界に達したこと、インド洋への交易ルートがグレートジンバブエに近いサビ川からよりスワヒリ諸都市に近いザンベジ川に移動したことなどが背景にあったとみられる。

遺跡は3つの地区から成る。ヒル・コンプレックスと呼ばれる丘の上の遺跡は国政の中心地であり、大きく東西2つのエンクロージャー(石囲いの区画)に分かれる。4つの小塔を戴く高石垣が印象的な西エンクロージャー(写真①)は首長の住居であった。その奥に位置する東エンクロージャーは天然の奇岩と石垣が複雑に折り重なった空間で、首長らが祭礼を行う場所だった。Zimbabwe Birdsと呼ばれる、鳥が彫刻された8本の石柱はここで発見されたものである。一時期は海外に散逸していたものの、現在は遺跡内の博物館で現物を見学できる。また天然の岩が舞台のような形を呈している箇所があり、そこは首長が着座する祭礼の中心であったようだ。ガイドさん曰く、この舞台はZimbabwe Birdの形をしている(写真②)。そのほか麓へ呼びかけるため声を反響させたという洞窟(写真③)も見学した。

麓に位置するのが特に有名なグレートエンクロージャー(写真④)である。高さ7mほどの石積の壁が長軸約70mの楕円を描き、北と西に2つの出入口を持つ。石積は西面より東面の方が緻密に積まれており、一連の構造物とはいえ年代と技術の差を見て取れる。ガイドさん曰くここは首長の妻や子息の住居であったそうだが、ヒル・コンプレックスから降りてきた首長の住居とするものや成年式に伴う教育施設とするものなど異説もある。重厚な石積の下部には排水溝が設けられた箇所があり、この構造物が一定の計画に基づいて造られたことが伺える。それにしても、同じ大きさの直方体に切り出した石を隙間なく積んでできた、うねるような曲線(写真⑤)のなんと美しいことか。ここはぜひ吉國の叙述を引用したい。

直線や直角を嫌い、規則とか定型の類を退けるその姿は、思わずポストモダンと形容したくなるほど、乱雑、気まぐれ、あいまいであって、かつまた、のびやかで優雅な雰囲気たたえている。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

なおヒル・コンプレックスとグレートエンクロージャーの間に、3つ目の地区である谷の遺跡がある。吉國によればこちらこそ妻や子息の住居であったようだ。ガイドツアーでは案内されなかったが、立ち入ってみると小規模なエンクロージャーが点在し、塹壕のように掘り窪めた石積の通路(写真⑥)でグレートエンクロージャーと結ばれているのが観察できた。

なおガイドさんによれば、19世紀末にヨーロッパ人が初めてこの遺跡を調査した際、発見した木片がレバノン杉に似ていたことから、彼らはこの遺跡をフェニキア人の遺産と断定した。アフリカに見られる高度な文明を現地アフリカ人でなくコーカソイドに帰する、この時代特有の「ハム仮説」の論法である。私は卒業論文でルワンダにおけるハム仮説に触れたので、ジンバブエにおける例を知ることができ興味深かった。

2. カミ遺跡

グレートジンバブエが没落したのち、現在のジンバブエの北東部にムニユムタパ(モノモタパ)国、やや時間を置いて南西部にトルワ国という2つの継承国家が成立した。後者の首都だったのがブラワヨ近郊に位置するカミ遺跡である。トルワとは支配王朝の名前で、地名を取ってプトゥア国とも呼ばれる。カミ(Khami)は王の称号であった。15世紀半ばから1700年頃にかけて繁栄したトルワ国はグレートジンバブエと同様に金や象牙を輸出し、また塩の生産も行っていた。輸入された中国の陶磁器が発見されたほか、インド洋交易に参入したポルトガルによってヨーロッパの産物ももたらされた。

カミ遺跡もグレートジンバブエ遺跡と同様、丘上のヒル・コンプレックスに首長が住み、その下に家臣や一般住民が住まう石積の遺跡であった。グレートジンバブエとの違いはガイドさん曰く2つある。1つ目にトルワ国では王妃がヒル・コンプレックスで王と同居していた。2つ目にグレートジンバブエでは石積により自立した壁が築かれたのに対し、カミでは丘の法面を補強するように石積が築かれた(写真⑦)。高さが明らかに異なる水平な削平面を造成し、そこに住まう者の身分の上下をより明確に可視化する狙いがあったのだという。これに加えてグレートジンバブエの石積は必ず曲線を描くのに対し、カミの石積は隅を設ける点も私には気になった。首長と面会する者が検査を受け象牙のオブジェの前で宣誓を行った番所の跡(写真⑧)や、後世ヨーロッパの宣教師が十字架を取り付けた自然岩の祭壇(写真⑨)など、細かい見どころも多い。

ところで、どの史跡にも保存していく上での困難がある。たとえば日本の城跡では地震で石垣が崩落したケースが毎年のように報告される。ガイドさんによれば、カミ遺跡には当時の石積が崩落し詰め直した部分は今のところないとのことだ。しかし危機が皆無というわけではない。遺跡の主要部は金属の柵で囲われているのだが、これは牛除けである。当然牛は史跡のことなど知る由もないため、遠ざけないと踏み壊してしまうリスクがあるのだという。一応近隣の大学が積み直しの技術を持っているようである。

3. 所感

私は吉國の著作で予習してから現地に行ったため、特に予想外の感動や発見を得たわけではない。おおよそ期待通りのものを見た。しかし期待通りのものが見られるというのは、すごいことである。吉國が両遺跡を訪れてから40年近く経っているのに、私が今でも現物を見て彼の言葉を噛み締めることができるのだから。世界遺産にまで登録されているとはいえ、政策、経済、治安など諸々の状況が変われば史跡の保存活動など簡単に途絶えてしまう。殊にアフリカではそのリスクも高かろう。しかしジンバブエでは、お世辞にも史跡への観光客が多いとは思えないにもかかわらず、史跡を保存する努力が連綿と続けられてきた。しかもマトボの壁画のような他時代の遺跡もあるし、ブラワヨの鉄道博物館のように遺跡以外の歴史文化財が活用される場も様々存在する。人が住み始め、国家を形成し、植民地化され、独立するという、アフリカ諸国に大方共通した歴史の筋書きを、見たり触れたりして体感できる国こそジンバブエである。このように考えてみると、ジンバブエだけでなくアフリカ全体の独立を取り扱った Museum of African Liberation がジンバブエにあるのは実に相応しいことかもしれない。今回の研修では行き損ねたので、いつか訪問したい。

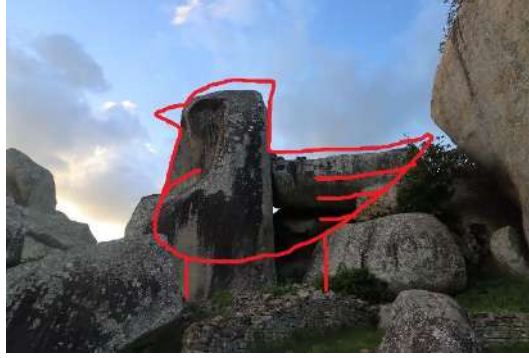
【参考文献】

吉國恒雄『グレートジンバブエ: 東南アフリカの歴史世界(講談社現代新書 1473)』講談社、1999年。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



写真⑨

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.14 ジンバブエ自然史博物館・ブラワヨ鉄道博物館

東京大学理科一類 2 年 朝倉 穰司

1. ジンバブエ自然史博物館

3 月 12 日の午後、ブラワヨ中心部にあるジンバブエ自然史博物館を訪問した。この博物館はジンバブエ国内では最大、南部アフリカ地域でも有数の大きさを誇る博物館であり、外観は東京の国立競技場を思わせるような円形の、三階建ての建物であった。

中に入るとまず、ジンバブエ国内で見られる野生動物のはく製が展示されていた。キリン、シマウマ、インパラなど多くの野生動物が展示されている中、目玉は巨大なゾウのはく製であった。このゾウのはく製は世界で 2 番目に大きなものであるとのことであった。

(左:ゾウのはく製、右:鉱物の展示)

その次には、ジンバブエの主要産業である鉱業の展示があった。建物内に採掘坑が再現されており、レールに乗ったトロッコや坑内労働者の人形などもあって、採掘現場の実際の様子を想像できるような展示であった。壁には、採掘の方法や採掘坑に関する詳細な解説とともに、採掘に用いられていた各種道具も多く展示されていた。

その後は、国内で採掘される各種鉱物資源の展示が続いた。石炭、ニッケル、銅などをはじめ、レアメタルや放射性鉱物などの展示もあり、ジンバブエの豊富な地下資源を実際に目で見て体感することができた。

博物館の建物はドーナツ型になっており、中心部は円形の吹き抜けになっていた。設立は 1962 年との説明であったが、外観、内装ともに比較的きれいに保たれており、近年改装したものと思われる。建物の地盤は地下水が多く、特に地下部分の建設時には湧水などに悩まれたとのことであったが、その地下水を有効活用して館内を涼しく保っているとの説明であった。



(左:ゾウのはく製、右:鉱物の展示)

2. ブラワヨ鉄道博物館

自然史博物館の訪問後は、ブラワヨ鉄道博物館に訪問した。ブラワヨは、植民地時代のケープタウン～カイロを結ぶ南北回廊鉄道の通過点であり、1897 年にジンバブエ国内初の鉄道として、ボツワナから伸びてきた路線の終着地でもあった。そのため現在もジンバブエ国営鉄道の本社が置かれており、博物館もある鉄道の町である。

博物館の入り口には、ローデシア時代の Shavma 駅の駅舎が移築されており、中の駅務室もそのまま、現在の博物館の事務室として使用されていた。その他中には、ローデシア時代の機関車の写真や、路線図などが展示されていた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



(左:ローデシア鉄道初号機機関車、右:ジャック・ター機関車)

駅舎を出ると、ローデシア鉄道の蒸気機関車初号機をはじめ、複数の蒸気機関車や客車が屋外展示されていた。実際に運転台や客車内に入ることができ、腕木式信号の操作や手押しトロッコなど、体験型の展示も多くあって楽しめる形式になっていた。客車の他にも、貨車や医療用の客車、貨物輸送で補助的に用いられていたトラックなどが展示されていた。

屋内にも展示がつづいており、さらに多くの客車などが展示されていた。目玉はセシルローズの専用客車であり、生前の彼、そして死後には棺を運んだ実際の客車がそのまま展示されていた。中に入ることはできなかったものの、外から豪華な内装を見ることができた。ほかにも、当時の白人観光客が乗っていたとされる開放的なベンチのような客車や、荷物を運ぶ手押し車などの展示があった。また、鉄道の歴史や功労者に関する展示、当時の通信機器や道具など、鉄道に関するあらゆるものの展示がされていた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

★サンセットクルーズ

早稲田大学文化構想学部現代人間論系三年 筑本普

3月13日、旅の終わりが近づいてきた私たちはブラワヨを後にし、四つ目の都市ヴィクトリアフォールズへ向かった。この日の目的はそう、私筑本が渡航前から熱望していたサンセットクルーズである。料金は一人当たり40ドルほどで、クルーズに乗ってザンベジ川を登りながら夕陽を見るというものだ。このクルーズにはなんとオープンバーが併設されており、スナックなどの軽食も出る。

夕方にヴィクトリアフォールズに到着し、ホテルに荷物を置いて一息ついたあと、まだ空が青い頃に乗船した。私はまず白ワインを頼み、皆で乾杯をした後、各々が写真を撮ったり、談笑したりしながら夕暮れを待った。すると、誰かが声を上げ始め、皆がそちらにカメラを向け始めた。私も目をやると、2頭のカバが水面からこちらを覗いており、しばらくしてそのまま遠くへ行ってしまった。彼らにとって私たちは外から来た存在であり、水面の上で騒がしく酒を飲んでいるだけだっただろう。しかし、私はなんだか彼らが私たちを歓迎してくれているような気がした。もちろん、私たちは彼らの生活を邪魔しないように、あるいは脅かさないように、遠くからただ眺めるしかない。ただ、その一定の距離感が私たちと野生動物にとってひとつの共生のあり方のように感じた。他にも、クロコダイルや水鳥が歓迎してくれた。そうして、日はどんどん暮れていった。

日が落ちる前にもなると、空は紅く染まり、川面もオレンジが煌めく深い青へと変わっていった。その頃には幾らかの酒と、長旅の疲れとが相まって、チームの何人かが完全に“出来上がって”しまっていた(かくいう私もそのひとりである)。船上の人は皆、黙って日が落ちるのを眺めていた。その景色の美しさに言葉を失ってしまっていたのだろう。私の目には夕陽が揺れていた。



クルーズで頂いた白ワイン



泳いでいくカバ



ザンベジ川に沈む夕陽

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.15 ワンゲ国立公園サファリツアー

東京大学前期教養学部文科三類1年 今村颯来

3月14日、我々はワンゲ国立公園にてサファリツアーに参加し、日本では体験することのできない大自然を堪能した。

ヴィクトリアフォールズから4時間弱、道の状態も悪く慣れない車両での移動であったが、その疲れは美しい日の出やサファリツアーへの興奮のおかげで忘れ去られ、サファリカーに二手に分かれ乗車するころには皆浮足立っていた。

風を感じつつ悪路を疾走する中で我々が最初に出会ったのは、アンテロープの一種、Kuduであった。遠かったものの特徴的な耳が可愛らしく、印象に残っている(なおこの日の夕食にてKuduのシチューが提供され、何とも言えない思いを抱いたが美味であった)。時を置かずしてシマウマの群れやイボイノシシ、ヒヒ等に遭遇したが、個人的に最も野生を感じたのはインパラの群れとすれ違った時だった。我々が日常的に目にする動物というのは、動物園で寝そべっていたり、牧場で草を食べていたり、どうしても静的でのんびりとした印象が強くなってしまふ。我々を警戒しつつ、何にも遮られることなく駆けていくインパラたちの姿は、野生で生き抜くことの緊張感と、サバンナの広大さを実感させてくれた。

ワンゲを熟知したドライバーは我々を、リクエストしていたキリン、ライオン、象の居場所へと案内してくれた。ライオンの群れが休む茂みへと向かうと、彼らは昼食としてキリンの赤子を捕食している最中であつた。期せずして食物連鎖の瞬間を目にすることとなり、我々にとっては衝撃的かつ貴重な体験となった。計3頭のキリンや水辺に集まる象も無事我々の前に現れ、非常に満足のいくサファリツアーとなった。

一方で今、ジンバブエでは深刻な干ばつが発生し、ここワンゲでも動物たちの命を守るべく、人工の汲み上げ式水場等が設置されるなど大きな影響が出ている。観光資源としてこの自然をいたずらに消費するだけでなく、持続的にこの楽園を保全するために我々ができることを考えるべきだろう。



図1: インパラの群れ



図2: ライオンの雌とキリンの肉

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

★レストラン Boma

東京大学前期教養学部理科一類1年 モー チャーン

3月14日。ワンゲ国立公園のサファリから戻ってきて軽く休憩して、同じホテルの敷地内にある Boma の会場へと向かう。観光庁の方から聞いた情報によると、Boma というのはジンバブエの文化が体験できる、ダンスとか音楽とかがセットになったディナーらしい。よくわからないが、ロッジを出発した段階で既に会場から太鼓の音が聞こえてくる。Boma の会場の入り口で、伝統衣装っぽい服装？を着たスタッフのお兄さんお姉さんが歌&踊りで歓迎、顔にちょっとしたフェイスペイントを施してもらい、自分たちの席へと案内された。まずウェルカムドリンクとしてソルガムを発酵させて作られた伝統的なお酒であるチブクが一口分出される。メンバーのほとんどが3日のムビラの儀式の際にチブクを経験済みなので、進んで飲みたい数人だけが飲んだ。食事はビュッフェ形式で、様々なお肉のグリルや野菜のサラダ、ベジタリアン向けの野菜のグリルなども用意されていた。変わり種では、蚕？の料理も出されていて、何人かは挑戦していた。



(左: BOMA のビュッフェの様子。中央: 蚕に驚くメンバー。右: 踊りのパフォーマンスの様子。)

ある程度食事が盛り上がってきたところで、フェイスペイントをしてくれる方が回ってきて希望者にフェイスペイントを施してくれた。描く絵柄は気分決めていているらしい。一方、伝統衣装らしきもの？を着たパフォーマーの方々が来て中央の広場で軽快な歌とともに太鼓のパフォーマンスを見せてくれた。その後、客にも小さな太鼓が配られて、太鼓をリズムに乗せて叩いた。叩くテンポが速くなってくると手が痛くなってくる。

その後、全員真ん中に集められてダンスタイム。先頭は我々のメンバーの先輩 M が飾る。様々な客がパフォーマーの人に呼ばれてどんどん踊っていく。ノリがいい人もいればダンスがめっちゃうまい人もいる。そんななかで自分もついに呼ばれ、なぜか先輩 G と一緒に踊ることになった。そんな感じで BOMA はお開きとなり、長かった一日が終わった。

楽しいディナーの場ではあったものの、お客さんは白人がほとんどで他も黒人のエリート層っぽい方ばかりで、パフォーマーの人も、アフリカっぽい衣装は着ているものの、このような服装はジンバブエに来て初めて見るものばかりであった。この Boma もいい値段したし、儲かっているのだろうということが分かっているけど、観光客の求める「アフリカっぽさ」を利用したビジネスに、このヴィクトリアフォールズという街がアフリカ随一のリゾートであることを思い出させられた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.16 ヴィクトリアフォールズ

東京外国語大学国際社会学部国際社会学科アフリカ地域専攻2年 平ひより

3月15日、この日はヴィクトリアフォールズを訪れた。ヴィクトリアフォールズは別名「Mosi-oa-Tunya」と呼ばれる。これはトンガ語で The Smoke that Thunders という意味である。本来3月というのは雨期であるため、この名の通り煙のような霧が辺り一面を覆いつくして何も見えない常陽に陥ってしまうはずだったが、旱魃の影響により水位が低く、乾季とそれほど相違ない環境で壮大な滝を眺めることが出来た。ヴィクトリアフォールズには6つの滝がある (Devil's Cataract, Main Falls, Horseshoe Falls, Rainbow Falls, Armchair Falls, Eastern Cataract)。ヴィクトリアフォールズといわれて多くの人がイメージするのは Main Falls のことである。私たちは Devil's Cataract, Main Falls, Houseshoe Falls までを見て回った。



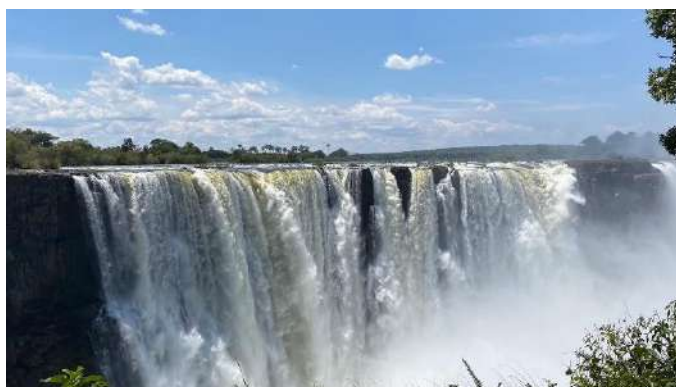
(←ヴィクトリアフォールズの全体図。)

まずは Devil's Cataract。他の滝に比べて細かったものの、その分水量が多く、一番近くで見ることが出来た滝であった為、その点で壮大な感じがした。干ばつの影響で水位が低いとはいえ、この時点でミスト程度の水はかかった。



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

次に回ったのは Main Falls。写真でよく見る光景が広がっていたが、それでもやはり直接近くで見ると圧倒されるものであった。広くて落差も凄い！天気も良く、滝に虹もかかっている、ヴィクトリアフォールズ観光には絶好の環境であった。



最後となったのは Houseshoe Falls。1つ前の Main Falls でも傘がないと少ししんどいくらいの水が降りかかってきていたが、この滝の前では傘ですらあまりその役割を果たさないほどの水しぶきが降りかかった。その霧の影響で辺りは曇って見える。ゲリラ豪雨に近いと言えるかもしれない。対岸にザンビアの Devil's pool も見えた。ヨーロッパ人らしき人が水に浸かっているのが確認できた。



(←中央に見えるのがザンビア側にある Devil's pool。)

このように観光にはうってつけのヴィクトリアフォールズであるが、自然公園の役割もしっかり果たしている。私たちが通った遊歩道沿いには樹木が生い茂っていたが、滝からの水しぶきがそれらに潤いを与え、豊かにしているという。また、そのようにして鮮やかに生い茂る樹木をすみかとするサルなどの動物も生息しており、本当に多様性に富んだ自然公園であると感じた。また、あちらこちらにヴィクトリアフォールズの概要を説明する案内板が立っていたが、説明の横にはスポンサーらしきジンバブエの企業の商標がいくつも並んだスペースがあり、国家としてはもちろん企業もこの世界遺産を守り、多くの人々を引き付けるものにしていきたいという意思が感じられた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.17 マトボの丘群

東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻二年 星野光莉

3月16日はマトボの丘群に訪れました。マトボの丘群はジンバブエのブラワヨにある世界遺産だ。マトボの丘群の魅力といえば二つ、セシル＝ローズをはじめとする白人入植者のお墓(写真1)と洞窟壁画である。

セシル＝ローズといえば南アフリカのケープ植民地首相となり、イギリスの帝国主義政策を推し進めた立役者の一人である。アフリカのナポレオンとも呼ばれた彼だが、帝国主義に基づく植民地政策を行った白人の一人であるため、アフリカの人々からの印象は決して良くはないだろう。実際南アフリカのケープタウン大学では2015年にキャンパス内のセシル＝ローズの銅像が学生たちの抗議によって撤去されるという事例も起きている。このような背景があったため、セシル＝ローズのお墓がジンバブエで有数の観光地とされているという事実にも半ば懐疑的になりながらも、マトボ国立公園へと足を運んだ。最初にガイドの方からセシル＝ローズのお墓がここにできた理由や、他にどのような人物が眠っているのかなどの説明を受けた。やはり、観光地だからか、白人の観光客が多いように見受けられた。緩やかな丘を登り、頂上にたどり着いたとき、そこで私たちが目にした景色はまさに「圧巻」の一言であった。マトボの丘群は別名「View of the world」とも呼ばれていたが、まさにその名にふさわしい景色が眼下には広がっていた。通大な自然とどこまでも続く地平線、地球の丸さと空の広さをあそこまで感じることはもう二度とないのではないかと思えるほどの絶景であった(写真2)。

絶景を思う存分目に焼き付けた後、私たちはもう一つの目玉、洞窟壁画へと向かった。この丘にはおよそ二千年前にサン人が定住し数百点に及ぶ岩絵群を残したと言われている。実際に洞窟内部に入り懐中電灯で壁を照らすと、二千年前のものとは思えないほどはっきりと壁画を確認することができた。像やキリンといった動物をはじめ(写真3)、人のシルエットも確認することができた(写真4)。

マトボの丘群は雄大な自然と、長い歴史の遺物を両方楽しむことができるまさにジンバブエ有数の観光スポットであった。



写真1



写真2



写真3



写真4

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6.18 観光省副大臣との面会

東京外国語大学国際社会学部国際社会学科アフリカ地域専攻 2年 平ひより

3月17日、ジンバブエ研修最終日、空港へ移動する前にブラワヨのレストランでムガンナグワ観光省副大臣と面会を行った。ムガンナグワ大統領の甥であるとのことで、どんな人物なのか、どこまで質問して良いのか。彼が登場するまではワクワクしつつも緊張感のある雰囲気にもまれていた。しかし、実際対面してみると、こちら側が予想していたよりも具体的に質問に答えてくださった。



(左:ジンバブエ国営放送のインタビューを待つ研修代表(写真中央左)とサークル代表(写真中央右)。
右:面会の最後、副大臣・観光省の方々と。)

※右写真引用:<https://x.com/zbcnewsonline/status/1769316650401124451?s=46>

こちら側から副大臣に質問した内容は大きく分けて次の3つである。

- ① 観光産業、特に世界遺産の環境保全の状況・施策等
- ② ジンバブエ国内の交通インフラ・街並み整備
- ③ 国民の観光意識

①について、ジンバブエではSDGsに従い、持続可能な、次の世代へ継承できる環境保全政策を行っているという。そのような条件下での施策として、都市開発の制限、例えば世界遺産周辺への企業の誘致や高層建造物の建設、スポーツカーの走行規制などである。ちなみに、世界遺産とは少し逸れるが、ジンバブエ国内の文化や環境保全政策の企画立案には JICA が協力している。

②に関して、政府としてはバス、鉄道、飛行機等の交通機関へのアクセスを向上させようとしている。1つの事例として副大臣が仰っていたのは、ヴィクトリアフォールズに空港を作ったことである。ハラレやブラワヨといった国内線はもちろん、ケニア、南アフリカ、ナミビア、ボツワナ、エチオピア、そしてドイツ・フランクフルトへの国際線も就航している。この状況を見ると、インバウンドの人々がジンバブエの観光産業において重要な役割を果たしていることが分かる。

一方で、ジンバブエの街並みは都市によってかなり異なる印象を受けた。私たちがこの研修で訪れた3都市(ハラレ、マシゴ、ブラワヨ)のうち、ハラレは公的機関が立ち並ぶ中心部こそ綺麗に整備されてあったが、少し離れるとごみが道路沿いにたくさん捨ててあり、お世辞にも整った街並みとは言えなかった。これに対し、他2都市は、道路沿いにごみが捨ててある光景はほとんど見受けられず、むしろ道端にごみ箱が設置されてあるなど、かなり整備されている印象を受けた。このような、都市によって異なる環境整備の度合いの理由を副大臣に尋ねてみると、政治的背景が関係しているという。ハラレは首都であるが故に、様々な考えを持った人がたくさんいる。その為、政府主導で街の整備を行うことが他の都市に比べて難しい。対照的に、マシゴやブラワヨでは、各行政がきちんと管轄

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

出来ているため、街並みが比較的整うのだそうだ。政治的な背景が街並みにまで現れるのという事実はとても驚いた。

③の国民の観光への意識について。ヴィクトリアフォールズでは、前述したように近郊に空港がある影響もあってか、海外からの観光客が非常に多く、賑わいを見せていた。しかしハラレに滞在していた際YASDの方の話によると、ジンバブエ国民のほとんどはそのような観光地には行ったことがない、そもそも行けないという。理由としては物価が非常に高いことに加え、旅行するという文化・概念がそもそもあまりないからなのだそうだ。しかしながら、インバウンドからの収益に偏ってこの産業全体が頼ってしまうと、昨今の COVID-19 のような出来事があった際にこのセクターは急激に衰退してしまう。そこで政府及び観光省は、国民の観光意識の向上、国内旅行の促進のために観光地の入場料等の割引や、祝日の新たな創設、国内向け観光キャンペーンを推し進めている。特にこのキャンペーンは「Zimbho」と呼ばれる。最近では母の日スペシャルパッケージとして、サファリツアー・カヌー・南部アフリカのバーベキューのプランや、イースターパッケージなど、多様なパックがホームページ上で公開されている。実は私たちが初日ハラレの空港に到着した途端、このキャンペーンのロゴが入ったTシャツを全員配布されていた。何のことかよく分からないままこの日までの 2 週間弱を過ごしてきたが、最終日にしてようやくこの Zimbho の意味が判明することとなった。



(引用: いずれも <https://zimbabwetourism.net/zimbho/>)

ジンバブエの観光産業と環境保全に関心があった私にとって、ジンバブエの観光産業・政策のほぼトップである副大臣との面会は本当に貴重な機会であった。政府の考え・副大臣の観光産業に対する考えを聴くことが出来、観光に対する熱意が感じられた。今後さらにジンバブエの観光産業は伸びていこうと、ただの一学生ながら感じた。

7. 個人研究

7.1 ジンバブエの物流インフラ比較研究

東京大学理科一類2年 朝倉穰司

1. はじめに

この研究では、ジンバブエにおける物流インフラ、特に道路鉄道を用いた物流の構造変化について扱う。ジンバブエは、植民地時代からインフラ網が比較的整っていた国であり、また内陸国でもあるために物流インフラの重要性が高い。一方で、決して効率的に運用されているとは言えず、課題が多いのが現状である。そこでこの研究では、ジンバブエの物流構造の変化をたどり、現在の構造を分析することでジンバブエ、ひいてはアフリカの内陸国における物流の課題を探ることを目的とする。

2. 地理的背景

ジンバブエは、南アフリカ、ボツワナ、ザンビア、モザンビークと国境を接する内陸国であり、南部アフリカ地域の中央に位置する。旧イギリス植民地時代に計画された、南アフリカのケープタウンとエジプトのカイロを結ぶ南北回廊の経由国であり、現在に至るまで南部アフリカ地域の重要回廊が多く通る。これらに併せて、石炭をはじめとした鉱業や農業が植民地時代に発展したために、インフラも計画的に建設された。その結果、アフリカ諸国の中でも道路鉄道網が比較的充実している国の一つに数えられるようになった。

ジンバブエは内陸国であるため、輸出入には近隣外国の外港に頼らざるを得ない。首都ハラレから最も近い港はおよそ 600km 離れたモザンビークのベイラであり、植民地時代にはここが主に使われていた。もう一つは南アフリカのダーバンであり、ここはサブサハラアフリカ最大の貿易港となっている。



図1: ダーバン港の様子 *5

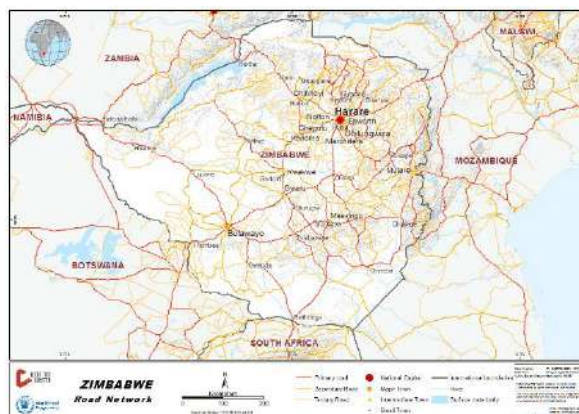


図2: ジンバブエの道路地図 *4

3. 歴史的背景

ジンバブエのインフラ開発は、鉄道から始まった。1880年代から計画、建設がはじまり、1897年にボツワナ国境からブラワヨまで初めて開通。そこから1910年頃までは現在のネットワークが概ね完成していた。その後国有化され、1980年の独立後、現在の National Railway of Zimbabwe (NRZ) として運営開始となり、今に至る。一方道路網も同時期に開発が始まっているが、全体のネットワーク完成はより遅れた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

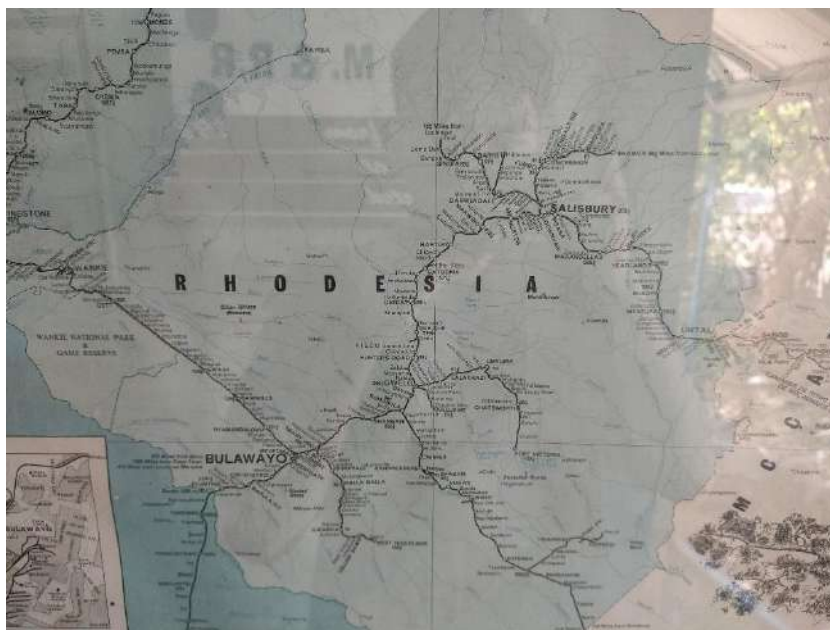


図3: ローデシア鉄道路線図 ジンバブエ鉄道博物館にて著者撮影

ローデシア時代において貨物輸送を担ってきたのは専ら鉄道であり、独立後まではその傾向が続く。大きな転機となったのはムガベ政権下での農業政策と、それに伴う不況、経済制裁であった。白人農地の強制収容政策により、それまでアフリカの穀倉とまで呼ばれたジンバブエの農業生産は激減し、それが鉄道分野にも打撃をもたらした。生産量減に加え、産業構造が小規模化したことで、鉄道による大量輸送よりも自動車による小口輸送が適するようになっていった。加えて、不況と制裁により国内は深刻な外貨不足に陥り、車両更新や燃料確保が困難になっていった。

世界的にも、1980年代からトラックの大型化、高性能化が進み、貨物輸送の自動車への移行が進んでいった。ジンバブエにおいても例外ではなく、鉄道の貨物輸送量は、下表のように激減し、その分自動車での貨物輸送量が大きく増加した。

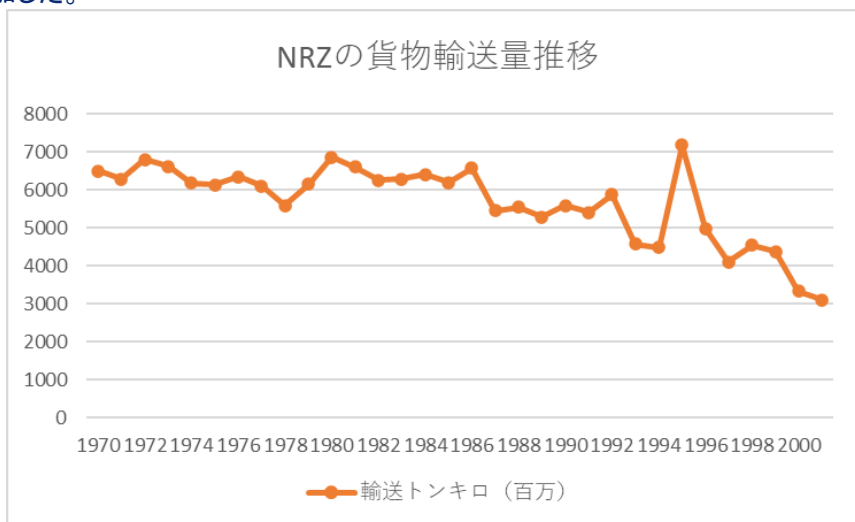


表1: NRZ の貨物輸送量推移 *2 より著者作成

また、外港の転換も同時期に進んだ。ローデシア時代にはベイラが主に使われていたが、移行が進んで現在ではジンバブエの輸出入の7割程度がダーバンを経由している。これは、世界的な産業自由化の進展、南アフリカの経済発展によって企業が南アフリカに集中していったこと、貨物船の大型化や、国際貨物輸送の構造変化により大きなダーバンの港が好まれるようになったことなどが主な要因である。

4. 課題

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

このように構造転換してきたジンバブエの物流インフラであるが、いまだに多くの課題を抱えている。代表的なものとしては、まず鉄道の運用効率の悪さであろう。車両の老朽化、燃料不足をはじめ、技術者の国外流出や資金不足など、深刻な問題が重なり運用効率が大幅に悪くなっている。従業員1人あたりの捌け交通量を示す労働生産指数は390であり、南アフリカの3308、ザンビアの502など、近隣諸国と比べても低くなっている。特に頭脳流出は運輸分野に限らず全国的に深刻であり、現地でも何度かそのような話を聞くことがあった。

持続可能性や環境への影響の観点からも、自動車に貨物輸送が依存しきってしまうのは問題である。実際、日本や欧州でも、環境に配慮して鉄道による貨物輸送を再び増やそうという動きは高まっている。自動車輸送はエネルギー効率が相対的に低く、また貨物自動車の増えすぎによって交通渋滞の悪化や道路の劣化が早まるなどという問題もある。

税関の手続きの所要時間も大きな課題だ。南アフリカとの国境はトラックの増加により混雑が常態化しており、数日足止めされることもあるという。自動車や鉄道の運用効率も低くなり、貨物遅延による罰金なども発生するため、大きな問題である。この問題に対してはJICAのプロジェクトでも取り組まれており、出国と入国で二回ある手続きを一本化するなどの事業が進められている。

5. 渡航を経て

本題から少しずれるが、実際に現地に行ってみて感じたインフラの様子も記しておきたい。

道路の舗装状況は、ハラレ市内は決していいとは言えず、かなり穴が多いところもあった。一方で、都市間道路、ハラレ～マシゴ～ブラワヨまでは非常によく整備されており、日本で走ると大きく変わらないレベルであった。特にハラレ～マシゴは南アフリカへ至る経路の一部であるため、交通量が多く整備状況もよかったのだと考えられる。

車両は、日本ではなかなか見ないようなフルトレーラーや大型のトラックが多く、大陸の輸送規模の大きさを感ずることができた。ただやはり穴の多い箇所や未舗装のところはとても走りにくそうにしており、インフラ整備の重要性を感じさせられた。

ヴィクトリアフォールズにて、ジンバブエとザンビアの国境の橋を渡った。橋は道路鉄道併用橋であり、大型のトレーラーがずらっと並ぶ光景を見ることができた。手続きにはかなり時間がかかってそうであり、やはり税関の効率化は重要な課題であることを実感した。

鉄道は、随所で線路を見ることはあったものの、実際に車両が走っているところを見ることはできなかった。ただ現地の方に話を聞くと、今でも走っているとのことであった。

6. 結論

ジンバブエは、地理的、歴史的にも物流インフラの重要性が高く、アフリカ諸国の中では比較的良い状態で整備が進められてきた。しかし、産業構造の変化をはじめ、多方面からの影響にさらされて構造転換を迫られ、非効率な構造のまま現状に至っている。そして、これらの問題はジンバブエに限った話ではなく、アフリカの他の国にも当てはまる状況である。アフリカの各国で今後インフラ開発を進めていくにあたっては、その土地の様々な背景を理解し、産業や政府など多方からの影響を十分に考慮していくことが重要であるだろう。

7. 参考文献・画像引用

*1 Pushak, N., & Briceno-Garmendia, C. (2011). Zimbabwe's infrastructure: a continental perspective. World Bank Policy Research Working Paper, (5816).

*2 Mbohwa, C. (2008). Operating a railway system within a challenging environment: Economic history and experiences of Zimbabwe's national railways. Journal of Transport and Supply Chain Management, 2(1), 25-40.

*3 Pedersen, P. O. (2004). Zimbabwe's changing freight transport and logistical system: Structural adjustment and political change. Journal of Southern African Studies, 30(3), 577-602.

*4 Zimbabwe Logistics Infrastructure – Logistics Cluster 2024年4月8日最終閲覧

<https://dlca.logcluster.org/2-zimbabwe-logistics-infrastructure>

*5 Africa Ports 2024年4月8日最終閲覧 <https://africaports.co.za/>

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.2 アフリカにおける日本の活動に関するジンバブエでの考察

東京大学前期教養学部文科三類 1 年 今村颯来

1. はじめに

今回ジンバブエ研修に参加するにあたり、私はかねてより研究を行っていた日本による平和構築活動、そしてアフリカと日本の関係性の展望について、現地からの視点で考察を加えたいという思いから研究テーマを設定した。本報告書は、まず日本にて行った事前研究とそれに基づく調査方針を示したうえで、現地でのインタビューを中心とした調査結果を記述し、最後に結論と考察によって結びとする構成となっている。

2. 事前研究

事前の研究において、私はアフリカにて平和構築・維持活動を行う複数の国家や国際機関の特徴を分析し、日本がアフリカ地域に対して持つ独自性と可能性の仮説を提示した；すなわち、日本は歴史的・政治思想的な観点から、欧米に対しアフリカが抱くマイナス感情や両者間の不和を招く要素を持たず、また対外的に行使可能な武力を有さないために、中国やロシア、北朝鮮とは異なり、現地に不要な圧迫感を与えずに対等な関係性を築ける、というものである。事実、日本はアフリカにおいて「人間の安全保障」を最優先に据えた政策を展開することによって他国との差異性を打ち出している(外務省[2021])、(JICA[2021])ほか、当該地域のうち三カ国で行った世論調査において国民の対日感情は概ね良好であった(外務省[2016,2022])。

3. ジンバブエにおける調査の方針

ジンバブエの情勢はアフリカ域内ではかなり安定しており(外務省[2024])、研究対象の根幹である日本による平和構築及び維持活動はあまり盛んではない。一方で前述のとおり、「人間の安全保障」が日本の活動の軸に据えられていることから、今渡航では外務省による「草の根・人間の安全保障無償資金協力」、及びこの活動や JICA の協力に対し現地の人々が抱いている感情、また単なる対日感情に着目し研究を進めることにした。

4. 現地調査

以下、現地での調査・観察の結果を簡潔に述べる。

4.1. 日本大使館

日本はジンバブエに限らず、世界各地で資金協力や平和構築に従事しているが、現場から見た他国との大きな違いとしては、協力を行うことによる発生する自国の利益を重視するのではなく、現地の視点に立った取り組みを主体的に行っている点があげられるようだ。

大使館職員の立場から推し量った、ジンバブエの姿勢の人々が日本に抱いている印象は好意的であることが多く、その理由は中古車として性能の良い日本車が全土に広く流通していることが一般的である。一部の、第二次世界大戦の敗戦国としての立場から高度な経済成長を遂げたことを好印象の根拠とする知識人層を除いては、それ以上の印象を持たない者が多いようだ。

ジンバブエ国内で活動する他国と比較すると、歴史的なわだかまりがなく、かつ前述のとおり現地主体での活動実施が基本であることが日本の強みとして顕著であるようだ。

大使館は協力活動の主体であるからして、それらの活動に対し現地の人々が持つ率直で忌憚のない意見を耳にする機会はあまりないようだった。

4.2. JICA

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

JICA と大使館は立場こそ違えど、実際に行う活動の本質は共通していることが多いため、オフィシャルな活動内容及びそれに対する印象は大使館と変わらなかったが、現地コミュニティにより密接にかかわっていることから、現地の人々が日本に対して抱く印象についてはより具体的な意見を聞くことができた。そもそも日本に対して具体的なイメージを持たない者も多いようで、「アジア人」というより大きな枠で、ときにはマイクロアグレッションを感じるような言動に出会うこともあるようだ。

4.3. the HALO trust

the HALO trust はジンバブエにおいて、日本が「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の枠組みで多額の出資を行っている(外務省 [2023])、地雷除去を専門としたイギリスに本拠地のある NGO である。こちらに関しては、別途訪問先報告書を参照されたい。

4.4. 現地の人々

4.4.1. 都市近郊

ハラレにて我々に話しかけてきた自称ライターの男性は、「自分はエプワース地区(JICA による協力活動が長年行われている地域)出身で、JICA のことが大好きだ」と話しかけてきた。我々が記事を買わないとわかると態度を変えたため本心であるかはわからないが、JICA により現地コミュニティに利益がもたらされているという認識を彼が持っていることは確かだといえるだろう。

滞在中に出会った若い世代、具体的にはハラレの空港の店員や、ジンバブエ大学の学生たちはアニメや漫画のカルチャー面、また SNS のショート動画で日本に触れることが多いようで、それを起因としたポジティブな印象(Cool Japan 的なものや、いつか日本に行ってみたいという願望)を持っているようだった。またセグリゲーションが顕著な市街とは異なり空港には多くの中国人が訪れるようで、同じアジア人でも日本人は珍しく新鮮だという発言も聞くことができた。一方で外交や国際協力の観点からは、「さらに交流・協力が強化されるとよい」といった意見は聞いたものの、既存の二国間関係は彼らに印象を与えるためには弱いようだった。

4.4.2. 農村部・貧困層

今回は日本の活動が行われている農村部また貧困層を訪ねることができなかったため、当項は参考程度の記述となる。

まずハラレ-マシゴ間のある農村では、日本人研究者による訪問の経験があったために「日本」という国の認識はあったものの、ジンバブエにおいてどのような活動をしているのかまでは知らないようだった。

また、ハラレ近郊の貧困にあえぐ層が暮らす Hatcliffe 地区では、多くの人が日々の生活に精いっぱいであり、自分たちの地区にも支援や協力をしてほしいという考えを持っているようで、他地区で何がすでになされたのかを気にする余裕はさほどないために日本の活動への確固たる印象を持っている人は話した限りでは見受けられなかった。

5. 結論

まず事前研究にて示した、「日本は歴史的・政治思想的な観点から、欧米に対しアフリカが抱くマイナス感情や両者間の不和を招く要素を持たず、また対外的に行使可能な武力を有さないために、現地に不要な圧迫感を与えずに対等な関係性を築ける」という仮説に関して述べると、大使館や JICA など、現地で就業する日本人の方々から、この説を裏付けるようなインタビューへの返答をいただいた。現地の人々の反応も、日本の事業を知っていても知らなくても、大変好意的な印象を持ったものであったため、おおむねこの説は立証されたといえるだろう。

一方で、市井の人々の中には日本のことをそもそもよく知らない、という人も多かったが、この点に関してはつまり、両国の二国間関係にさらなる発展の余地が大いにあることを示唆しているといえるだろう。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

6. 参考文献

外務省,[2021],「TICADの背景にある日本の考え方」

https://www.mofa.go.jp/mofaj/af/af1/page22_002578.html(閲覧日:2023-08-10) .

外務省,[2016,2022],「海外における対日世論調査(ケニア・コートジボワール・南アフリカ)」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100023108.pdf> (閲覧日:2023-06-30).

外務省,[2023],「対ジンバブエ共和国 事業展開計画」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000072405.pdf> (閲覧日:2023-11-28) .

外務省,[2024],「海外安全情報」

https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pchazardspecificinfo_2023T088.html#ad-image-0 (閲覧日:2024-04-10) .

独立行政法人国際協力機構(JICA), [2021],「事業について:平和構築」

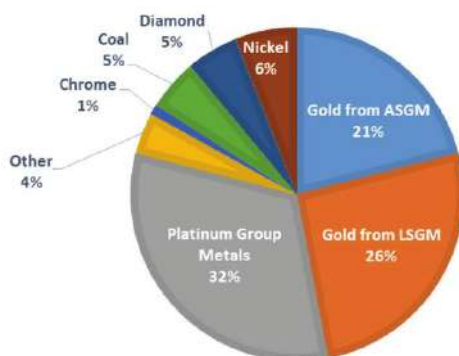
<https://www.jica.go.jp/activities/issues/peace/index.html> (閲覧日:2023-08-10) .

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.3 「再エネ」とともに考えるジンバブエと鉱物資源循環

東京大学工学部システム創成学科 E&E コース 3年 榎原菜央

ジンバブエでは、40 種程度のレアメタル・レアアースを含む鉱物資源が産出されている*1(鉱種としては 60 以上賦存している*2 とのこと)。片岩帯と呼ばれる剥がしやすい金銀等の鉱床を有するため、労働力の 7.1%, GDP の 2.6%は金という大産業だ。金以外にも、世界第 2 位のプラチナ鉱床を有するため白金族金属(PGM)、クロム、金、石炭、リチウム、ダイヤモンドを中心に、産出量がニッケル 19 位、クロム 6 位、プラチナ 3 位(JOGMEC)である。国内総生産(GDP)の 12%、国家輸出の 80%が鉱業セクターの鉱物資源大国である。



(Mineral share in Zimbabwe's total minerals output value, 2016 *3 より)

これらレアアース・レアメタルは再生可能エネルギーの利用に欠かせない。ジンバブエにはアフリカ最大・世界第 6 位のリチウム鉱床を持つが、リチウムイオン電池は、火力・原子力と比較して供給量を調節しにくい再生可能エネルギーの蓄電に最も現実的な手段として不可欠である。その他、スマホをはじめ電子機器の基盤・電気自動車にも、高い磁気的性質を持つ金属を用いた電池やコンデンサなどの部品が欠かせない。

今回大きな発見だったことは、多くの鉱物資源はジンバブエで採掘後に中国や南アで製錬が行われている点だ。付加価値の高い精製後の鉱物・加工した状態の材料などの輸出はまだあまり行われていない。そこで、国内最大のプラチナ企業である Zimplats は、現在プラチナ濃縮液を南アフリカに送って加工しているが、2021 年より BMR(Base Metal Refinery)プロジェクトを進め製錬所改修に取り組んでいる(*4)。さらに同社は、太陽光発電所プロジェクトも進めており、民間セクターが世界的な環境問題にまつわるトレンドを追っている様相に見える。スマホなど最終製品になった状態で輸入している製品のの一部も、最終的なアセンブリをジンバブエ国内で行うなどの試みが可能性ある選択肢かもしれない。

最後に、エネルギー資源について述べる。民家や学校施設など、いたるところの建物に太陽光パネルとバッテリーが置いてあった(写真は YASD で訪問した小学校にて筆者撮影、水汲み・共同スペースのテレビ用)。都市部では停電対策が主目的のところも多く、実際ハラレのゲストハウス滞在時の停電では蓄電装置に助けられた。人口次第で今後大規模電源が普及してきて、電源が分散していることはリスクの分散になる。南部アフリカの電力取引の地理的中心地にあるジンバブエは、カーボンクレジット、太陽光を含めエネルギーの確保の仕方でも幅広い選択肢から選んでいけるのだろう。



【参考文献】

*1 International Trade Administration U.S. Department of Commerce. “Zimbabwe - Mining and Minerals”. Country Commercial Guide. <https://www.trade.gov/country-commercial-guides/zimbabwe-mining-and-minerals>, (2024-04-05).

*2 Ministry of Mines and Mining Development. Mineral Potential Booklet. Government of Zimbabwe. January 2018. (<https://miningzimbabwe.com/wp-content/uploads/2018/12/Zimbabwe-Mineral-Pontential-Booklet.pdf>)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

*3 Mukono, Tichaona & Ngoro, Tinashe O. & Mapamba, Liberty & Dembetembe, Gift & Dzimunya, Nevaid & Mabikire, Tinashe. (2018). Strategies for Sustainable gold processing in the artisanal and small-scale mining sector in Zimbabwe. Conference: SAIMM ASM Conference 2018: Fostering a regional approach to ASM transformation in sub-Saharan AfricaAt: Nasrec, Johannesburg.

https://www.researchgate.net/publication/328381942_Strategies_for_Sustainable_gold_processing_in_the_artisanal_and_small-scale_mining_sector_in_Zimbabwe, (2023-12-17).

*4 Mining Zimbabwe. “ZIMPLATS Revs Up Base Metal Refinery (BMR) Renovation”. News, January 19th 2024.

https://miningzimbabwe.com/zimplats-revs-up-base-metal-refinery-bmr-renovation/#google_vignette, (2024-04-08).

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.4 ジンバブエの農業部門における女性のエンパワーメント

上智大学法学部国際関係法学科 2年 齊藤舞

1. はじめに

ジンバブエはかつて「アフリカの穀物庫」と称されるほどの農業大国であり、広大かつ肥沃な土地を有しており、ジンバブエの多くの人は農業の分野に携わっている。アフリカ開発銀行（以下、AfDB）とUN womenの協働により公表された「Zimbabwe-Gender Profile」での「女性の経済的なエンパワーメント」の項目において、特徴的な数値が二つ見受けられた。一つは、農業従事において男性よりも女性の方が、割合が高いということだ。そして、もうひとつは、土地の所有者に関して男性の方が女性よりも約二倍多いということだ。以下の二つの事実から、農業部門に多くの女性が従事しているのにも関わらず、土地保有者の割合が少ないというパラドックスな状態に疑問を抱いた。従って、本レポートでは実際ジンバブエの農業部門における女性がどのような状況にあるのかについて考察していく。

2. アフリカ開発銀行のジェンダーに関するスペシャリストにお話を伺った上での考察と事前学習

1章の前提を踏まえて、AfDBのPrincipal Gender Officer（ジェンダーの専門家）であるDana Elhassanさんにインタビューをし、ジンバブエの農業部門における女性に関してお伺いをした。まず、事前にデータ分析を実施した結果では、農業部門で多くの女性が活躍しているという数値が発表されているが、これに関して実際はどのようにしているのか。アフリカの農業は、基本的に家族での農園経営により、賃金が安価で雇用されやすい状況にある。女性は男性の半分しか支払われない。（Zimbabwe-Gender Profileより）女性の土地へのアクセスが少数であるという部分に関しては、土地の保有が伝統慣習法上で規制されている場合があり、女性に土地が寄与されないという面がある。従って、土地の保有ができないことで労働者として雇用される道しか残されていないということだ。また、女性は技術が具わっていない割合が高く、単純作業の仕事しか選択肢がない。そして、土地への貸し付けがなされないこと背景には信頼度を図る材料が不足しており、貸し付けの条件が満たせないことがある。総括すると、農業部門の女性には「負のサイクル」が生じており、資金がないことが、土地が持てないことに繋がり、土地が持てないことが低賃金労働につながり、最終的にはこれが資金のないことに繋がるというものである。しかし、最近の若者の傾向としては土地を持たなくてもビジネスができるように変革が生じているという。

	Female	Male	Female	Male	Female	Male	Female	Male
Women's economic empowerment								
Labour Force participation rate 15+, female and male	78.3	89.0	78.4	89.0	78.6	89.0	78.7	89.0
Employees, agriculture (% of female and male employment)	71.6	63.1	71.4	63.0	71.5	63.2	71.6	63.3
Employees, industry (% of female and male employment)	2.2	12.1	2.2	12.2	2.2	12.1	2.1	12.0
Employees in services (% of female and male employment)	26.4	24.9	26.5	25.0	26.4	24.9	26.3	24.7
Self-employed (% of females and male employed)	75.8	57.0	75.9	56.9	75.9	56.9	74.8	55.2
Employers (% of female and male employment)	0.4	0.7	0.4	0.7	0.4	0.7	0.30	0.64
Access to credit (%)	3.1	5.0
Landowners (% of adult population)	29.9	70.2
Employment rate in the informal economy
Vulnerable employment	75.5	56.4	75.6	56.2	75.6	56.2	74.6	54.6
Youth unemployment (2016)	9.7	7.7	9.2	7.4	9.1	7.4
Wage and salaried workers (% of female and % of male employment)	24.3	43.1	24.2	43.2	24.2	43.2	25.1	44.7
Firms participation in ownership (% of firms)	42.5	57.5

(Zimbabwe-Gender Profile p5 より)

3 現地での訪問を踏まえた考察 ～実際はどうであるのかという聞き取り～

今回の研修において、ジンバブエの農業に従事する女性やジェンダーに関するお話を幾つかの訪問先でお伺いすることができたため、それについて言及していく。

(1) 伝統的文化が根付いている場所

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

ムビラの儀式に参加した際、非常に興味深いことを耳にした。それは女性に限定して、生理時期にはムビラの儀式の参加を許されていないということである。女性の生理が邪悪なものであるというように捉えられており、神聖な場所への立ち入りを禁じるものであった。この点から伝統的文化、慣習としてのジェンダー観が伺える。

(2) 日本国大使館訪問

ジェンダーに関しての団体である「Gender Commission」を紹介して頂いた。この団体では、ジェンダー平等に向けた議論の場を定期的に設けており、国会の議席に女性枠を設けることにより、政治的なジェンダーバランスを図っているというクォータ制の制度を導入サポートしたという。現地で実際にジェンダー不平等を問題として掲げ、解決の方法を審議する組織の存在からは、人々のジェンダー問題に対する意識の高さが感じられる。そして、それに付随して、ジンバブエの地域社会は社会全体で子育てを担っていくという風潮が根付いているという相互扶助の社会である。端的に述べると「お節介」ということになるが、日本と比較したとしてもそういった地域社会は子育てにメリットを与えるものであると考えられる。また、男女に格差がない選挙を実施するような支援が UNDP の方で行なわれている。従って、ジンバブエはジェンダー問題に対して、比較的意識が高く、解決しようという動きが見られる。

(3) WFP 事務所訪問

まず、女性の土地所有が伝統慣習法により制限されることがあるのに関しましては、都市部は殆どがそのような状況にはなく、現状女性も土地へのアクセスが可能になりつつあるとした。しかし、農村部の女性に関しては一部の地域で伝統的慣習法が未だに維持されている場合も考えられ、完全に制限されているとは言い切れない状態であると知った。

WFP はハラレで農業に従事する女性に対してキノコ農園を設立し、キノコ栽培を援助した事例がある。キノコ栽培の大きなメリットとしては、肉体労働がそこまで必要とされず、場所を取らないという部分にある。また、キノコは肥料等を用いることで、約 3 ヶ月で収穫が可能であるため、持続的な栽培が可能になる。さらにキノコは栄養価が高い。従って、収入源と栄養源の確保が可能となる。キノコの他にもピーナッツがこの種の支援で作物として選ばれるという。実際にこの活動の当事者の女性の声としては、WFP の支援により、一時的な金銭的給付による生活の向上にとどまらない、持続可能な生活が営めるようになったという。

(4) YASD

技術の習得という面で、農村部の女性が生理用品を自ら布を用いて製作し、経済的自立を目的とした支援がなされていた。技術習得という点で非常に重要であるが、販売網がないという部分に課題を感じた。これでは、大量に生産できたとしても売れずに収入源が持続的に確保されない。また、不法地帯に滞在する農業従事者の女性らの声としては、気候変動に悩まされており、作物の不作状況が顕著であり、かつ作物を販売するマーケットがないことが課題として挙げられていた。農業に対して、知識を持たない小規模農業家としては課題解決方法が挙げにくい状況にあることを知った。

(左写真: 女性に対して職業訓練を実施する場所に訪問した際の写真、右写真: 不法地帯に住む農業に携わる女性らにインタビューを実施している際の写真)



(5) JICA 事務所訪問



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

JICA 発の市場志向型農業の導入により、小規模農業家に対する技術向上プロジェクトが実施されている。このプロジェクトの特徴はジェンダー研修が含まれていることだ。ジェンダー研修の内容としては主に三段階存在しており、一つ目は家庭内の役割を可視化することにより、女性の負担を顕在化させることだ。二つ目は財産権に対する主導権をどちらがどの程度有しているかを認識すること。三つ目は農業に対して生産効率を向上化させるためにはどのような役割分担が重要になるかを検討することである。この三段階を経ることにより、ジェンダーに関する固定観念の認識を実際にしてもらい、農業の効率化を図るためにはジェンダーの固定的観念に基づく役割分担ではなく、協働を図ることが大事であるということを示している。

4 おわりに

ジンバブエの農業分野における女性は伝統的慣習法で土地へのアクセスを制限されていた状況から変革を遂げつつある。農業に携わる女性に対して、国内での現地の人々によるジェンダー観改善にとどまらず、それに加え、農業に関してノウハウを有する団体や組織が積極的に気候変動に強い農業対策やマーケティング方法までフォローアップをすることで、彼女らの経済的自立性が向上し、ジンバブエの国としての農業産業を向上することができる可能性が秘められている。

<参考文献>

- ・ African Development Bank, "Zimbabwe-Gender Profile", 2022, [gender profile by AfDB Zimbabwe.pdf](#)
 - ・ UN Women, 「Country Fact Sheet」, [Country Fact Sheet | UN Women Data Hub](#)
 - ・ 早瀬保子, 「ジンバブエ女性の配偶関係構造」, [ja \(jst.go.jp\)](#), (最終閲覧日: 2024/4/8)
 - ・ Human Rights Watch, 「You will get nothing」, 2017, [ジンバブエ: 夫と死別の女性 財産権を奪われる | Human Rights Watch \(hrw.org\)](#)
 - ・ Zimbabwe Gender Commission HP, [Zimbabwe Gender Commission \(zgc.co.zw\)](#)
 - ・ WFP, 「Zimbabwe: Mushroom-growing means independence for women farmers」, 2021, [Zimbabwe: Mushroom-growing means independence for women farmers | World Food Programme \(wfp.org\)](#)
- 独立行政法人 国際協力機構 HP, 「市場志向型農業振興プロジェクト」, [プロジェクト概要 | 市場志向型農業振興プロジェクト | 技術協力プロジェクト | 事業・プロジェクト - JICA](#)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.5 トンゴガラ難民キャンプにおける経済活動と外部との関係

東京外国語大学 国際社会学部 アフリカ地域専攻 1年 櫻井みさき

◎はじめに

ガーナのブジュブラム難民キャンプにおけるフィールドワークについてつづった本、「アフリカの難民キャンプで暮らす ブジュブラムでのフィールドワーク401日」(小俣直彦、2019年、こぶな書店)を読み、難民自身が生み出す経済活動について興味を持った。中長期化した難民キャンプでは、水やフルーツの小売業から、塾や床屋など、人々が支援に頼るだけではなく、自らの生業活動をもとに収入を生み出している。¹本レポートでは、ジンバブエのトンゴガラキャンプではどのように人々が経済活動をしているのか、またそれに対する外部機関のかかわりについても紹介する。このことを調査することで外部機関が難民キャンプ住民に対して今後どのように関わっていけばよいのかを解明することができると考えている。

◎トンゴガラ難民キャンプについて

トンゴガラ難民キャンプはマニカランド州、チピング地方、チパンガイ地域に位置しており、首都ハラレから550km南東に行ったところにある。(図1)モザンビークでの国内紛争を逃れた人たちによって1984年に設立し、UNHCRによると2023年時点で23,508人の難民や、亡命者がいる。現在はコンゴ民主共和国全体の約54%を占めており、他にもモザンビークやルワンダ、エチオピア、ソマリア出身者もいる。(図2)

Figure 1: Map of Zimbabwe showing entry and exit points for refugees/asylum seekers

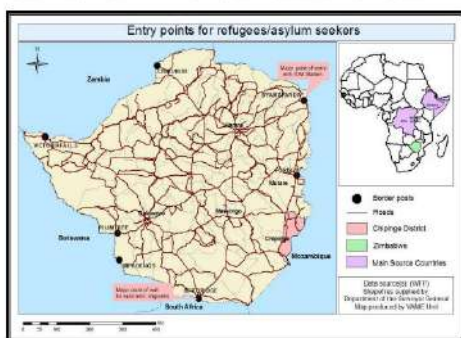


図1:トンゴガラ難民キャンプ 位置

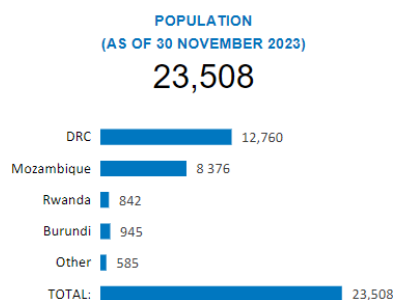


図2:トンゴガラ難民キャンプの人口と出身国

(UNHCR and WFP Joint Assessment Mission Report²より) (UNHCR Fact Sheet³より)

◎現地の経済活動について

今回は実際に2020年から2024年2月末まで約3年半トンゴガラ難民キャンプでJPOとして働いていらした、本田悠平さんにインタビューをした。私たちは実際にキャンプを訪れることができなかったため、以下に記す現地の経済活動の状況についてはこのインタビュー内容を元に述べていく。まずはインターネットに関連した経済活動について質問した。これは、小俣さんの本の中で、ブジュブラム難民キャンプにおいてインターネットカフェやレンタルDVD

¹小俣直彦「アフリカの難民キャンプで暮らす ブジュブラムでのフィールドワーク 401 日」こぶな書店,2019年,pp90-92

² “UNHCR and WFP Joint Assessment Mission Report: Tongogara Refugee Camp, Zimbabwe”, 2014,<https://www.unhcr.org/sites/default/files/legacy-pdf/5559a9ed9.pdf>

(最終閲覧日:2024/3/31)

³ UNHCR Zimbabwe Fact Sheet(2023/11) <https://reporting.unhcr.org/zimbabwe-factsheet-6565>(最終閲覧日:2024/3/31)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

ショップが経営されていたことが述べられていたからである⁴。元手がかかるこのような事業はトンゴガラキャンプでも行われているのか。ネットカフェについては NGO が経営している者はあるものの、難民自身で経営している店舗は見かけなかったそう。また、ネットデータについては食料品や日用品が集まる何でも屋、キオスクで販売しているのを見かけたそうである。ただ、高額なインターネットデータを商品として売るのに必要な分だけ買い集める経済力があるということは、キャンプの中でも相当な経済力を持っていることになる。

現地で多くの人が行っている経済活動については、日用品やコーラなどの飲料を売ることであった。売る品物をハラレで買ってそれをキャンプ内で売ることが多い。確かに需要は多いが、ハラレで購入することを考えると、一日働いても受け取れる利益は少ない。また、ハラレでインフォーマルセクターの職業についている人も多いようだ。このことは、ガーナのブジュラムキャンプに比べると、難民受け入れ国であるジンバブエが寛容であることが分かる。ブジュラム難民キャンプでは、キャンプ外でお店を出せるのは基本的にガーナ人のみで、難民は買い手としてのみ出入りすることが許されていた⁵。キャンプ外で働ける場所があることは、競争率を考えると利益は多くないかもしれないが、収入を得る機会に関しては増えることが予想される。難民の経済状況は、受け入れ国の対応によって大きく左右されることが明らかになった。

◎外部機関による協力・援助の現状

次に外部機関によってどのように難民キャンプへの物資の提供が行われているかについて質問した。トンゴガラキャンプでは WFP とジンバブエ政府により毎月1人当たり15ドルが提供されていた。今年からは7ドルとメイズなどの食糧に切り替わったそうである⁶。難民キャンプの住民間で経済格差の要因となりうるのは、第三国つまりは出身国と現定住国以外で資金援助をしてくれる個人的なつながりがあるかどうかである。小俣(2019)も、「同じキャンプ内に暮らす難民の間にも相当な経済格差があり、生活水準にも大きな違いがある(中略)その格差を生む最大の要因は(中略)先進国から「仕送り」を受けられるかどうかだった⁷。」と述べていた。実際にトンゴガラ難民キャンプでもこうした経済格差は明らかに起こっているという。基本的には UNHCR の物資支援である「毎月7ドル+メイズ」は人によって量や金額を変えていることはない。格差へのアプローチとしては、未亡人や障害のある人へ向けた石鹸づくりを通して就労の機会を与えているそうである。また、トイレの設置に300ドルがかかるのだが、その金額を出せるかどうかで困窮度合いを測っているようだ。全額出せる余裕のある人には全額負担してもらい、全額出せない人には半額や全額補助を受けられる。

また、トンゴガラ難民キャンプにおいて支援プロジェクトの大部分を占めているのが、農業プロジェクトである。住民たちはこのプロジェクトに参加し、得た収入で生活しているようだ。ジンバブエは元々農業が盛んであったため、そのポテンシャルを生かすべく、農業プロジェクトが多く行われている。具体的にはメイズの灌漑農業や、ビニールハウス栽培、豚などの家畜栽培を行っている。必要な土地は政府が提供し、援助機関が農業を始めるために必要な資本金を提供しているため、経済力によってプロジェクトへの参加が阻まれることはない。しかし、UNHCR は予算が削減されていることを示唆しており⁸、プロジェクトが難民全体に提供できるほど十分な数で遂行されているとは考えにくい。

⁴ 小俣直彦,前掲,pp86-90

⁵ 小俣直彦,前掲,pp79

⁶ 本田さんへのインタビュー,UNHCR Zimbabwe Fact Sheet,前掲

⁷ 小俣直彦,前掲,pp110

⁸ UNHCR Zimbabwe: Livelihoods update (July 2023)

<https://reliefweb.int/report/zimbabwe/unhcr-zimbabwe-livelihoods-update-july-2023>

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

◎外部機関の関わり方について 今後

ここでは上記のような地元住民の経済活動、外部機関によるサポートを踏まえたうえで、今後どのようなかわり方が望まれるのか考える。今回お話を伺った本田さんも述べていたことが、「難民問題の長引き」である。トンゴガラ難民キャンプは設置から今年で40年が経過する。UNHCRにお金を出している日本を含む先進国側も、いつまでお金を出せばよいのかとフラストレーションがたまっていくのが現状だ。2023年度のトンゴガラキャンプでUNHCRが要求した予算が1200万円だったにも関わらず、ウクライナ紛争による資金と組織の遂行に負担がかかっていることなどから、実際に支払われたのはその予算の32%に過ぎなかった⁹。UNHCRの方針転換によってプログラムが中止されたケースもある。ブジュラム難民キャンプでは避難元であるリベリアで停戦合意がなされて以降、UNHCRの目的がリベリア本国帰還を推進することになり、難民がキャンプにとどまることを促す起業資金の貸し出しプログラムはすべて廃止された¹⁰。トンゴガラ難民キャンプの多くの難民の出身国であるコンゴ民主共和国は、現在でも武装勢力による文民の攻撃・殺害が問題になっている¹¹。そのため、ブジュラムキャンプのようにキャンプ内のプログラムが今すぐに廃止される可能性は低いですが、今後の状況次第では今の生活を続けられない可能性がある。これらのことから、今後は外部の協力がなくても自分たちの力で続けられる生計の立て方を身につけることが大切であると考え。事業を始める際の資金の提供は必要であるが、その事業で得た収入で活動を回せる循環を作ることで、財政面や出身国の都合でUNHCRが手を引いても収入を得続けることができるからである。

今後外部機関がすべき役割として私が考えるのは、まずは生計支援プロジェクトを経済力などに関係なく、必要な人々に行き渡らせること、そしてすでにプロジェクトを受けている人々には外部機関の手助けなしに自立して収入を得られる方法を身につけさせることであると思う。

◎おわりに

ジンバブエ研修で「トンゴガラ難民キャンプについて関心がある」ことを伝えると、たくさんのジンバブエ人の方が、興味をもってキャンプについて話してくれた。一般的には閉鎖的になりがちな難民キャンプであるが、このことはトンゴガラキャンプがジンバブエ人にとっても開かれた場所であることを意味していると思う。実際に、キャンプ外の住民がキャンプ内に買い物をしに来るといった行為は頻繁に行われているようだ。今回の研究を通して、キャンプ内において自身で生計を立てることは簡単なことではないことがわかったが、トンゴガラキャンプに関しては受け入れ国であるジンバブエを見ても、キャンプ外との交流も豊かな明るいキャンプの雰囲気が想像できた。

(最終閲覧日: 2024/3/31)

⁹ UNHCR Zimbabwe: Livelihoods update, 前掲

¹⁰ 小俣直彦, 前掲, pp93

¹¹ 外務省 HP コンゴ民主共和国基礎データより抜粋

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/congomin/data.html> (最終閲覧日: 2024/3/31)

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.6 ジンバブエの観光産業とそれを取り巻く環境開発・保全の現状と展望

東京外国語大学国際社会学部国際社会学科アフリカ地域専攻2年 平ひより

1. はじめに

今日、観光産業は多くの国々において経済を回す重要な役割を果たしており、自国の良さを国外にアピールするチャンスとなっている。しかしながら観光産業を発展させることには弊害がついて回る。その1つが環境保全・開発問題である。例えば、日本においてはオーバーツーリズムが原因でポイ捨てが増えて景観が損なわれたり、犯罪行為が増加したり、世界遺産が観光客によって損傷を受けたりする。ジンバブエには3つの文化遺産と2つの自然遺産があり、ヴィクトリアフォールズといった世界的にかなり名の知れた自然遺産も存在する。その為、この国においても観光産業が今日において収入源としてより重視されるようになってきた。実際、2021年時点でも、観光に関わる分野のGDPの産業構成比は他のセクターと比較して大きい。(以下円グラフ参照。)

2021年GDPの産業構成



このような世界遺産を観光資源として最大限生かし、かつ保全していくために政府はどのような方針で UNESCO や民間企業と連携しているのか。世界遺産では景観を守るためにどのような管理を行っているのか。これらを調査し、考察する為、3つの世界文化遺産(グレートジンバブエ遺跡カミ遺跡、マトボの丘群)と、1つの世界自然遺産(ヴィクトリアフォールズ)を訪問した。

2. 仮説・結果

私はジンバブエ政府は UNESCO と特に緊密な協力関係を持って保全に取り組んでいるのではないかという仮説を立て、今回の研修に臨んだ。しかし、実際に現地を訪れたり、観光省副大臣、ガイドの方、観光庁の方に話を聞いてみたりした結果、UNESCO との連携よりも、地元・民間企業等との努力・協力が強いように感じた。

UNESCO は単に保全の方針を出しているに過ぎない様子であった。民間企業との連携体制を特に強く感じたのは、グレートジンバブエ遺跡とヴィクトリアフォールズである。グレートジンバブエ遺跡の入り口に設置されたごみ箱に「Keep Your Environment Clean」と記載された張り紙が貼ってあったのだが、それをよく見てみると MASVINGO TOYOTA というロゴが入っているのだ。トヨタがグレートジンバブエ遺跡になぜごみ箱を設置しているのか、ということまで調査するまでには及ばなかったが、民間企業が世界遺産の保全に協力している一つの事例である。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



(≒張り紙の右下、トヨタのロゴが見て取れる。)

また、ヴィクトリアフォールズでは、現地と周辺の街でグレートジンバブエ遺跡と同様な事例がみられた。現地の案内板・景観保全に関する注意書きの看板に UNESCO とジンバブエ政府のロゴに加え、ジンバブエの民間企業の商標がずらりと並んでいた。また、周辺の街の通りには、街の景観を守るためのごみ箱が多く設置されていたが、それらには付近のロッジやゲストハウス等宿泊施設のロゴがつけられていた。このように、企業が、街が、一体となって世界遺産を保全していこうとしているのである。



(左:案内板の横に掲載された、スポンサーの民間企業のロゴ。 右:張り紙の下方のロゴはこのごみ箱の後ろにあるゲストハウスのもの。)

また、直接世界遺産を保全する取り組みとしては、グレートジンバブエ遺跡では草刈り、石垣のモニタリング、カミ遺跡では壁画の風化を防ぐために現存の壁画のコピー、人が立ち入るエリアの整備が挙げられた。前者の世界遺産での石垣のモニタリングは本当に地道な作業で、1つ1つの石に生える雑草や藻を毎日監視、除去作業を行っているそうだ。後者の方の遺産では、環境保全に加えて壁画の風化にも立ち向かう必要があった。そこで、現存する壁画をコピーし、ミュージアムに展示することで遺産の存在を後世に伝えるという対応を取っている。また、環境保全の観点からは、人が歩くことによる地面の砂の舞い上がりを防ぐために、地面に石を敷き詰めるという活動も進めているという。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



(左:この石垣の石1つ1つを毎日モニタリングしている。中央:矢印の先にキリンの壁画がある。風化しつつある現状が見て取れる。右:壁画がある場所の地面は砂になっている所が多い。)

政府として遺産を保全するための取り組みとしては、周辺の都市開発を規制することである。観光省副大臣が仰っていたのは、高層建造物の建設、企業・工場の建設、スポーツカーの走行の規制であった。確かに、ヴィクトリアフォールズの街と首都ハラレを比較すると、明らかにヴィクトリアフォールズ周辺には高い建物が少なく、大きな会社や工場は無かった。これらの影響もあり、他の都市とは異なる、ある種リゾートの様な雰囲気も感じられた。

世界遺産を守るために、もう1つジンバブエの人々が重視していることがある。それは、地域社会・住民の世界遺産への関心意識を高め、その重要性・必要性に気づかせることである。どの世界遺産を訪れても、ガイドの方々や観光庁の方が共通して仰っていたのは、これらの教育を実施しないことには世界遺産の環境・景観を守ること以上に世界遺産自体を守れなくなってしまう、ということだ。ジンバブエの世界遺産の地道な環境保全はこの教育の上に成り立っている。

3. 考察・今後の展望

今回の研修全体を通して、政府・観光省は大まかな方針を立て、それを受けて観光庁・民間企業が実際に動いているという構図がある印象を受けた。また、教育が観光産業の分野でも重視されており、日本と同様「住民と自治体の連携」が重要なカギであることを改めて感じた。政府の方々の観光セクターへの熱意も非常に強く感じられ、さらなるジンバブエの観光業の今後の高まりを感じさせた。この産業の発展と環境保全の継続した両立が今後の課題であると考えられる。

日本において、この国は以前のハイパーインフレのイメージが強い国で、「アフリカは危ない」というイメージに当たり前のように組み込まれてしまう国の1つである。しかし実際渡航してみると、人の善さや発展への熱意を強く感じられる、ユニークで濃い国であった。ジンバブエに限った話ではないが、「アフリカ」のステレオタイプにはまらず、多くの日本人がもっとジンバブエをはじめとしたアフリカの国々に訪れ、それぞれの国の個性を認識していくべきだと考える。

《参考文献》

「ジンバブエのGDPと人口の推移」GD Freak!

<https://jp.gdfreak.com/public/detail/sp010001000119900218/>

最終アクセス日:2024/05/16

藪田雅弘「日本における世界自然遺産の保全と観光発展」『経済学論纂』[59], 3・4, 459-476.

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

https://chuo-u.repo.nii.ac.jp/record/11864/files/0453-4778_59~3_24.pdf

UNESCO World Heritage, (n,d), "Zimbabwe",

Retrieved May 16, 2024, <https://unescoworld.com/heritage-country/zimbabwe/>

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.7 ジンバブエの医療支援と一般の意識

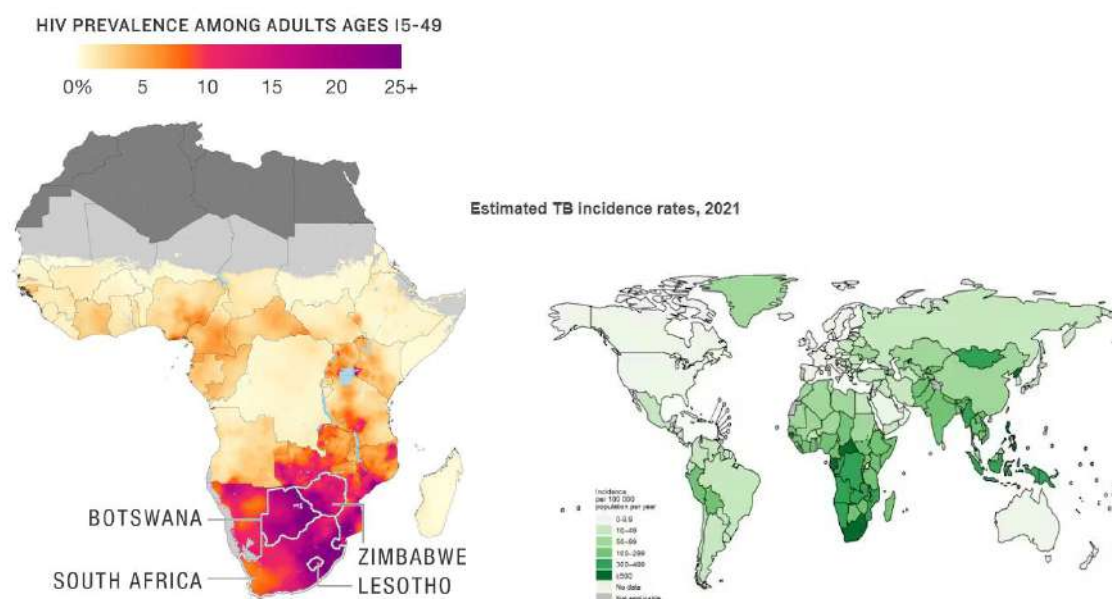
東京大学理科三類1年 田中成美

1. はじめに

今回の渡航で私が一番気になったことは、先進国による医療支援を現地の人たちがどう受け止めているかどうか、ということであった。このテーマにした理由は、わざわざ現地に行く意義を考えたからである。医療に関する支援プロジェクトはインターネットから見ることはできるが、実際に現地ですまく機能しているのか、現地の人々のニーズに合っているのかは直接行かなければ見えてこない、と考えた。このレポートではまず、ジンバブエ国内の医療の状況について取り上げ、具体的な機関の活動を紹介してから、現地に渡航して改めて見えてきた問題点と人々の医療支援に対する考えを書く。

2. ジンバブエの医療状況

乳幼児の死亡率は3.6%であり、日本の約20倍である。これらによる死亡率が最も高い、三大疾患はAIDS、結核とマラリアである。HIV罹患率は高く、15から49才の間では約12%、感染者数は全国で130万人と推測されている。結核について、罹患率は人口10万人あたり約200人である。そのうちの半数以上はHIVも合併している。マラリアは近年劇的に感染者数が減ったものの、まだ毎年10万人以上が発症、数百人以上が死亡している。コレラも雨量が増える雨期などに、汚染された水を媒介して流行することがある。



医者や看護師も海外に流出していて、2021年には4000人以上が国外流出した。そのため人手不足が著しく、公立病院はいつ行っても非常に混んでおり、患者は数時間待たされることも少なくない。診療や入院費自体は無料だが、薬代は国民の負担になる。

女性の権利は保障されているが、社会的な地位が低く、特に若い女性は性的暴力を受けることが珍しくない。初めて性行為をした年齢は平均すると16歳前後、初めて性的な関係を持った時に強制的なものであった確率は31%であった。

日本人のコカインの生涯経験率は0.3%である。ジンバブエでは使用率自体が3%と、薬物乱用の割合が非常に高いことが分かる。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

The figures and graphs below indicate the percentages of drug use, gender distribution, and behaviour barriers over the past year, by 293 people across five provinces: Bulawayo, Harare, Manicaland, Mashonaland Central and Mashonaland West.

Drug usage

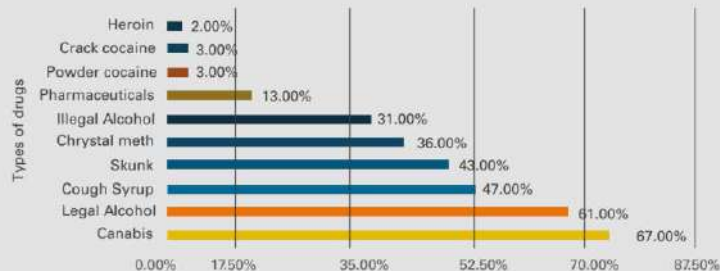


Figure 1: Gender distribution of drugs by injection (ZCLDN December 2022 page 25)

3. 支援内容の具体例と課題

私たちが訪問した機関で行われていたプログラムについて具体的に紹介した後、それぞれの課題について紹介する。

まずは現地の NGO 法人、YASD (Young Achievement Sports for Development) を訪問した。この団体の主な活動としてはスポーツによる教育を通して社会問題の啓発を行っている。啓発を行っている社会問題の中に、女性のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス・ライツがある。といっても、この団体も完璧なわけではない。この YASD の運営している小学生くらいの年代の子供が通う学校では、仕切りがなく、外から覗き込めば中が丸見えのトイレが5つしかないため、月経中の女子生徒は通うのが難しくなっている。そのため、学校は生理用ナプキンの作り方を教えたり、トイレを増やそうとしたりしている。学校で性教育もやっているが、スクワッター地区から来る女子生徒は経済的な困難から徐々に来なくなることがほとんどで、16歳前後で妊娠するケースが多いという。貧困地区こそ性教育が最も必要とされていて、しかも勉強する環境自体は整っているのに、経済的な理由からそれを十分に受けられないケースが多いことが分かった。

2つ目は、UNFPA (国連人口基金) である。女性のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス・ライツと乳幼児の死亡率を減らすため、サイクロンなどの緊急事態で病院にいけない事態に備えて、あらかじめ必要最低限の SRH 関連の物資が入っているパッケージを渡している。家族計画については避妊薬の普及に力を入れていて、特に避妊具は無料で配っている。都市と都市間でサポートの格差が生まれないう、地域に根ざした施設を開設したり、CBD (Community Based Distributors) という地域専門の人員を配置したりしている。西洋医学に対して否定的なコミュニティでは、リーダーを説得することに注力し、医学の健康的なメリットを強調するなどに対応している。しかし、コロナ禍やサイクロンでは家庭内の女性に接触することが難しくなり、DV が発見しづらい状況になったという。

最後は現地の NGO 法人、SolidarMed である。ここは Peer Educator という 10 代後半から 20 代前半の男女をリクルートし、ドラッグを使用している人たちにドラッグの危険性を知ってもらおうというプログラムをやっている。ドラッグの危険性を知っていながら、使っている若者は、仲間外れになりたくなかったり、かっこいいことをしていると思っていたりするようだ。同調圧力が若者をドラッグ使用に駆り立てていることが分かった。

4. 現地の人の声

現地の NGO 法人や国際機関はジンバブエの抱えている様々な課題に対して、様々な対策をしていることが分かった。

だが、実際に医療活動に関わっていない現地の人にインタビューしたり、遠回しに質問したりした感触として、ほとんどの人は興味がない、もしくはどういう活動が行われているか知らない、という状況で、特に意見を持っていないことを感じた。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

今回の渡航で会った人たちは経済的なばらつきが大きかった。観光省の職員、スーパーの店員、ジンバブエ大学の大学生(エリート層)、スクワッター地域の女性。彼らの中で医療関連職に就いている人を除けば、明確に現在の政府の医療政策に不満を持っている人は見つからなかった。ただ、全員が口をそろえていていたのは、安定した職が欲しい、ということだった。

5. まとめ

実際に現地に行ってみて感じたのは、医療援助に問題点があるというよりは、一番必要としている貧しい人がアクセスできていないことが一番の問題に感じた。支援活動の内容の改善より、いかに支援を行き渡らせるか(インフラ、情報の格差の是正)、大前提の衣食住を確保できるか、緊急事態にも安定して支援を供給し続けられるかが大切だと考える。今までは医療状況の向上にしか注目していなかったが、平行して安定的な収入や衣食住を確保しなければ持続可能ではないと思うようになった。今後は多様な方面の状況を加味する視野の広さと、必ずしも問題の原因は1つとは限らないということ意識して、発展途上国の医療状況を追っていきたいと思う。

6. 参考文献

“Global Health.” 2024. U.S. Agency for International Development. February 28. <https://www.usaid.gov/global-health>.

2024. Accessed April 13. <https://www.reuters.com/world/africa/over-4000-zimbabwean-doctors-nurses-left-country-2021-2022-11-20/>.

2024. UNFPA Zimbabwe. April 12. <https://zimbabwe.unfpa.org/>.

2024. Accessed April 13.

“Simbabwe: Gesundheit Dorf: Malaria, HIV/Aids: Geburt: Ausbildung Krankenschwester.” 2024. SolidarMed. Accessed April 13. <https://www.solidarmed.ch/en/simb>

“Mosa Moshabela,, Shira Gitomer, Bongiwe Qhibi, Helen Schneider”. (2013). “Development of Non-Profit Organisations Providing Health and Social Services in Rural South Africa: A Three-Year Longitudinal Study”. “PLOS”

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.8 ジンバブエにおける障害者

早稲田大学文化構想学部現代人間論系2年 筑本普

国際社会における障害者を取り巻く環境は絶え間なく変化し続けている。2008年に障害者権利条約が採択され、日本は2014年に締約国として参加し始めた。しかし、日本国内における障害者福祉は必ずしも国際水準に達しているとは言えず、国際社会からは厳しい視線が向けられている。日本の障害者福祉を批判するとき、常に比較されるのは特に高福祉国家である北欧諸国であり、欧米・先進国である。では、アフリカ・途上国における障害者福祉と比較したらどうだろうか。果たしてアフリカ・途上国は日本よりも「遅れている」と言い切れるのだろうか。むしろ今まで見ていなかったもの、欧米・先進国の障害者福祉における課題を解決し得るような何かが見えるのではないだろうか。これらの問いに対し、今回ジンバブエにおける障害者、特に障害児を取り巻く状況を考察していく。

まず、渡航前段階で把握していたジンバブエにおける障害者の福祉政策について簡単にまとめる。あまり情報は多くないが、少なくとも日本と比較しても、制度設計がされているとは言い難い。そもそもジンバブエは経済状況が悪化しており、福祉分野への支出が十分に確保されていないと推察される。一方で、伝統的に血縁・地縁に基づく共同体の中で障害者が生活していることも窺える。

渡航中、まず街中の様子を観察し、障害児の生活を捉えようとした。最初に気になったのは、歩道が舗装されていない、あるいは舗装されているアスファルトが劣化していることである。劣化した歩道は車椅子利用者や、弱視あるいは盲目の場合、移動の大きな弊害となり得る。また、路上の物売りの中に、車椅子に乗った少年を見かけたことも印象的であった。後述するような障害者支援が充実した私立の学校に通える障害児はほんの一握りであり、おそらく貧しい障害児の多くは、路上で金銭を獲得せざるを得ない状況に置かれていると推測される。また、先述した車椅子の少年を除けば、あまり街中で障害児を見かけることはなく、おそらくその多くは車移動が主となっているのだろう。

次に、今回アポイントメントをとり、訪問の機会をいただいたダニコ(Danhiko)・セカンダリースクールについて述べる。この学校は障害者の就業支援や障害者スポーツの推進を目的とするDanhiko Projectが関わっており、その障害の性質に応じて、インクルーシブ教育と特殊支援教育の両方が取り入れられていた。学校の敷地内では障害児の姿を多く見かけ、授業も日本も同じように座学が進められていた点が興味深かった。一方で、理事長へのインタビューの結果、精神障害や知的障害を抱える生徒はまだ受け入れられていないのが現状であるということを知った。取り組みが進められている施設においても、まだ課題はあるように思えた。

最後に、貧困地域の教育支援等を行うNPO団体YASDと共に訪れた居住区でのことを記録しておく。ここでは干ばつによって農作業ができなくなった女性に話を聞く機会を得た。その際、私が障害者は貧困地域においてどのように生活しているのかを尋ねたところ、介助者や医師の訪問はあるが、その頻度は少なく、滞在期間も短いため、医療費の高さも相まって、基本的には家族や近隣住民と助け合いながら暮らしているとの返答があった。また、インタビューを受けてくれた女性の中に、聴覚障害を持つ少女を娘に持つ母親がおり、YASDの職員を通して、その少女の置かれている状況について聞くことができた。まず、貧困地域においては先ほど言及したような支援の充実した学校に通わせることは難しく、また、通常の学校に通わせることすら金銭的な問題で難しいとのことだった。また、障害を理由に、将来結婚することも難しいこと、手工業品の技術を得ることで生計を立てるしかないということも知ることができた。

以上を踏まえると、やはり途上国における障害児を取り巻く環境は、インフラ整備や医療へのアクセスの問題など、国家として抱える問題と直結していることが指摘できる。一方で、日本に比べ、地域社会の中で障害者を包摂するという環境は維持されており、障害者の社会的隔離が課題とされている日本に対し、なんらかの示唆を与えることができるのではないだろうか。また、貧困地域における障害を持つ少女の置かれている状況は、障害者政策だけでなく、貧困の問題、結婚しなければ生活が難しいという女性の経済的自立の問題という複合的な問題を孕んでおり、昨今指摘されるインターセクショナリティ、すなわち複数のアイデンティティ(特にマイノリティ)の交差性と、それに対する取り組みの必要性を浮かび上がらせていたと言えるだろう。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

【参考文献】

「【JICA アフリカ障害者研修 研修員インタビュー①】「ムンスカ・サンダース」さん紹介とジンバブエのアルビノ事情について」(最終閲覧日:2024年5月17日) <https://www.dpi-japan.org/blog/workinggroup/international/%E3%80%90jica%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%AA%E3%82%AB%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E8%80%85%E7%A0%94%E4%BF%AE%E3%80%91%E7%A0%94%E4%BF%AE%E5%93%A1%E3%80%8C%E3%83%A0%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%82%AB%E3%83%BB%E3%82%B5/>

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.9 んビラ音楽の役割

東京大学 教養学部 理科一類 1年 中山 皓聖

んビラはジンバブエで生まれた楽器の一つである。当初んビラは、オショ、ンゴマなどとともに憑依儀礼で用いられる楽器であった。しかし、トーマス・マプフーモがんビラ音楽をポップス音楽と融合させて以来、憑依儀礼のみならず、日常生活における身近な音楽にもんビラが用いられるようになった。今回のジンバブエ研修では、以上のような背景をもつんビラの現状について、んビラ儀礼、ジンバブエ大学での交流、リング村、ボマにおいて調査した。また、それぞれのんビラの役割を考えることで、ジンバブエの現在の姿について考察する。



(左上:んビラ儀礼の様子、右上:んビラの演奏を披露してくれたジンバブエ大学の学生、右下:リング村でのブーレさんの息子さんたちによる演奏、右下:ブラワヨで滞在したホテルにあったンゴマ)

3月3日にハラレ郊外でのんビラ儀礼に参加した。ノートルダム清心女子大学の松平勇二先生に紹介していただいたサムソン・ブーレさんを中心とした演奏家の方々による演奏を聴いた。前半では伝統的なんビラ音楽を披露してくださいました。んビラの共鳴具であるデーゼはかぼちゃの中身をくりぬいたものが使われていた。デーゼには、さらに装飾とパーカッションの用途のために、瓶の蓋がつけられていた。以前は貝殻が使われていたものの、海がないジンバブエでは貝殻が貴重なので瓶の蓋に変わっていったのだという。演奏中には何人かの来訪客も訪れ、んビラ、オショでの演奏に加えて皆で歌いながら踊るという伝統的なスタイルに参加した。

昼食を食べ、後半では儀礼が始まった。莫産状のものと白い布が敷かれた後に一人のんビラ奏者が突然シャツを脱いで倒れた。ブーレさんによると、男性の霊が憑依したということだった。その後別の霊媒師にも女性の霊が憑依し、メンバーの将来についての相談を行った。

このようなんビラ音楽は、様々な障壁を超越する存在としてとらえることができる。音楽は物理的な壁を超越して、屋外にも聞こえる。そのため、音楽を聴いた人たちが集まって交流が始まった。このんビラ儀礼での交流では音楽を通して身分の差すら超越される。実際に、この日の演奏中にも地区のチーフが訪れ地元の人々と交流していた。デ

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

ユルケムの社会統合論によると、儀礼においては個人的な関心ごとにもみれた俗なる時間から、社会について意識を向ける聖なる時間へと転換する。憑依という形を通して助言を行っている儀礼も聖なる時間の実践であると考えられる。音楽の超越性によって成立する儀礼空間は、地位や身分に関係なく語らうことができるため、社会の安定装置の役割を果たしている。また憑依儀礼では、地上と祖先のいる空を隔てる空気を音楽によって振動させることで交信を行い、地上という空間を超越しているととらえられる。ンビラ儀礼にて祖先の霊を憑依させるところを実際に見て、音楽の超越性が果たす役割を実感した。

もう一つ儀礼において興味深かったことは、彼らの才能に対する考え方だ。彼らは自分が楽器を弾いたり、踊ったりしていることについて、「自分が talented だからだ。練習はしていない。」と答えた。同時に、踊り子は「私は踊りの才能に恵まれているが、ンビラの演奏の才能には恵まれていないから演奏はしない。」といった。私はこの才能に対する受動的な態度に、「才能がなくても努力するべき」と指導されてきた自分たちの感覚との差異を感じた。ショナ社会では、才能とは霊の一つであると考えられる。それゆえに、謝礼を受け取らないと霊が機嫌を悪くする、才能を使わないと「逃げる」と考える。才能に霊的能動性を見出すことはショナ社会での一つの大きな特徴であるといえる。

3月8日にはジンバブエ大学での交流を行い、その中でンビラを弾ける学生と話した。彼は、Jari Mukaranga や、Chemutengure、Changamire Mudzimu Dzoka といった伝統的なンビラ音楽を披露してくれたあとに、近年のジンバブエでの人気のミュージシャンを教えてくれた。彼によるとトーマス・マプフーモはいまだに根強い人気を誇る一方、Jah Prayzer や Chiwoniso といった若いミュージシャンも台頭してきているということだった。Prayzer や Chiwoniso の音楽は、マプフーモが確立したスタイル同様に、ンビラを用いながらもイギリスのロック音楽的要素を結び付けている。独立期にンビラ音楽はチムレンガミュージック(闘争音楽)として発達した背景がある。このナショナリズム的な基層文化と、旧宗主国イギリスのブリティッシュロックというコロニアリズムの影響が融和している状況は、現在のイギリスとジンバブエの友好的関係を示しているといえる。

3月10日にはブーレさんのご自宅があるリング村に伺った。リング村ではンビラ職人でもあるブーレさんの息子さんたちによる演奏を聴いた。また、リング村では、はじめてンゴマを見た。実際に弾かせていただいたところ、想像していたよりも音が響かず、演奏が難しかった。

3月14日にはビクトリアの滝の近くにあるレストラン「ボマ」にて夕食をとりながらンビラの演奏を聴いた。ボマでは、ンビラ、オショ、ンゴマに加えてバラフォンを用いてンビラ儀礼を模したパフォーマンスが行われていた。観光拠点として発達するビクトリアの滝らしく、ンビラ音楽を観光資源として利用する姿勢がみられた。また演奏中には客もンゴマと一緒に演奏するパートがあり、演奏者だけでなく皆で音楽を作り上げるというンビラ音楽の特性が活かされていた。

上記以外にもンビラ音楽や楽器はジンバブエの様々な箇所で見られた。グレートジンバブエ(カランガ村)ではンゴマを演奏できるコーナーがあり、私がンゴマを演奏していたところ突然踊りが始まる一幕もあった。また、ホテルやレストランにはンゴマが飾っている箇所もいくつかあった。マーケットでは、簡素化したンビラやオショ、ンゴマが販売されていた。

以上のようにンビラ音楽の役割を考えることで、ジンバブエにおける宗教、国際関係、生活スタイル、観光について考えることにつながった。ジンバブエという国自体と強い結びつきを持つンビラはこれからのジンバブエの発展にも寄与することが期待される。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

【謝辞】

ンビラ儀礼とリング村への訪問を取り計らってくださったノートルダム清心女子大学 松平勇二先生、ンビラ儀礼で演奏してくださったサムソン・ブーレさんとンビラ演奏者たち、そしてリング村の方々には心から感謝申し上げます。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7. 10 ジンバブエでの地域における学校教育の格差について

東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻1年 星野光莉

1. はじめに

私は、人々にとって幼少期、青春期の環境というものはその後の人生に大きく影響するものであるから、学校という教育の場は人々にもっとも影響を与えている環境ではないか、という個人的な見解から、学校教育の場を非常に重要視している。今回ジンバブエ渡航前に下調べを行った際に、2019年以前までジンバブエでは学校での体罰が合法であり、違法となった後も社会的慣習として容認されていることを知った。そのため当初の個人研究テーマとして私は「ジンバブエにおける体罰の実態」を調査しようと考えていた。しかし、実際にジンバブエで様々な地域の学校教育現場を目の当たりにして、私は現在のジンバブエの状況下では「体罰の実態」を調べることに意義はないということを強く実感したのである。その最大の理由として、私は渡航前までジンバブエにおける地域ごとの学校教育の格差を完全に無視しており、体罰という問題をすべての学校教育に当てはまる問題として一律に考えようとしていた節がある。しかし実際は地域における所得格差によって受けることのできる学校教育には雲泥の差があり、この格差を考えずして、体罰の問題など考えることはできないし、この格差こそが体罰を生み出す根本要因でもあった。そこで当初のテーマを修正し「ジンバブエでの地域における学校教育の格差」を研究テーマに添えることとした。本稿ではジンバブエにおける学校での初等・中等教育に焦点を当て、ジンバブエにおける学校教育の格差とはそもそもなにか、なぜその格差が生じているのかということ考察していきたい。

2. 学校教育の格差とは何か

学校教育の水準を図るうえでの要素はいくつか存在する。例えばもっともスタンダードなものとして人口の中で一定レベルの学校を卒業した人およびその割合がある。この指針に基づくと、ジンバブエにおいて初等教育を修了した者の割合は都市部で97%、農村部だと86%、中等教育においては都市部で78%、農村部だと40%と大きな格差がみられる(Analyses for learning and equity using MICS data, Zimbabwe Education Fact Sheets 2021)。しかし、私が実際に現地で感じた格差はほかにある。それは学校教育の質である。ここでいう「質」とは学校の設備例えば水道、電気の整備に始まり、十分な教室、トイレ、机、イスが確保されているか、また生徒に対して十分な教師の数が確保されているかといった、子供が学ぶ場としての役割を学校側が十分に果たしているかということを示している。私は実際にジンバブエ有数の私立学校(写真1)と貧困地区にある学校(写真2)の二つに赴き、その教育の「質」の格差を目の当たりにした。貧困地区の学校は設備に始まり、教師の数などすべてが不足していた。その学校は約900人の生徒を受け入れており、午前と午後で生徒を半分に分けて授業を行っていた。人数に対して教室が足りず青空教室で授業を行い、一人の教師が約100人の生徒を担当しているという状況。さらにドアや窓などの資材が足りないばかりか、水も十分にはない状況であった。トイレも900人以上の生徒に対してわずか5つしかなく(写真3)、衛生環境が非常に劣悪であり、感染症など新たな問題を引き起こす要因ともなり得る状況であった。このような環境下で仮に学校を卒業できたとしても、社会に出るために求められるスキルを身に付けられている可能性は、教育の質がある程度保障されている都市部の学校と比べれば極めて低い。データ上はこのような学校であっても卒業した時点で同じ学校教育のレベルを終了したとみなされるのだろうが、明らかに教育の質の格差が大きい。実際ジンバブエで7~14歳の子供が必要最低限の読み書きのスキルを習得できている割合は都市部で68%、農村部で37%、計算スキルにおいては都市部で41%、農村部で19%と格差は大きい(Analyses for learning and equity using MICS data, Zimbabwe Education Fact Sheets 2021)。また、格差という観点から話はそれるがそもそも都市部においてもこれらの数値は決して高い値とは言えず、ジンバブエ全体で学校教育の質や教育方法に問題があるという仮説も立てることができる。教育にどの程度の人々がアクセスできているかという点もちろん重要だが、仮にアクセスできていたとしても、そこで提供されている教育の質が十分なものであるのかという視座も必要である。今回ジンバブエにおいて私が一番に感じた格差は提供される教育の質であった。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



(写真1)



(写真2)



(写真3)

3. 格差は何によって生じているのか

都市部、農村部という区別でこれまで教育の質の格差を述べてきたが、すなわちこの都市部と農村部の違いというのは人々の所得であるといえる。都市部農村部という二項対立に単純化することで述べられる問題ではないが、分かりやすくそのように分けると、ジンバブエにおいてはやはり都市部と農村部の所得格差は非常に顕著である。それはデータ上から得られるものだけではなく、実際に足を運んで目にしてきたからこそ実感するところでもある。しかし教育の質という点においては根本の問題は所得格差ではない。初等・中等教育とは本来義務教育として国によって無償で人々の所得差関係なく提供されるべきものであるからである。ジンバブエにおいて授業料は無償化されているものの、主に学校の運営費や教科書の購入費など無償化されていない部分が多く存在し、その結果所得格差がダイレクトに教育格差につながってしまっている。所得の低い世帯が多く集まる貧困地域、農村部では、各世帯が十分に学校の運営費を負担することができずその結果教育の質を維持することができなくなってしまうのだ。ジンバブエでは2021年時点で国家予算の2.5%を教育の分野に割いているが、これだけでは完全な無償化を実現することはできないという。教育の質の格差を埋めるために、まずは国が主体となって現状存在する初等・中等学校の完全な無償化を目指し、最低限の教育の質を確保していく必要があるといえるだろう。

4. おわりに

ジンバブエでの学校教育の質の格差は、所得格差という非常に明確な要素に影響を受けているがゆえに、この問題の解決の糸口は所得格差の改善にあるように最初は思われた。しかし、そもそも所得差に関係なく平等な教育を受けることができる社会を実現すべきであり、それは教育へのアクセスが可能かどうかという視点だけでは測

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

れないものでもあった。今回の渡航で学校という場にとどまらず、ジンバブエの子供たちと直接触れ合ったことで私
が感じたのは、彼らの無限の可能性である。彼らが社会で最大限に自信のポテンシャルを発揮するためにも、ジン
バブエの学校教育の質を最低限確保する取り組みは不可欠であるといえるだろう。

【参考文献】

Analyses for learning and equity using MICS data, Zimbabwe Education Fact Sheets 2021

<https://data.unicef.org/wp-content/uploads/2021/12/Zimbabwe-MICS-EAGLE-Education-fact-sheets-2021.pdf>

UNICEF, 2022 Education Budget Brief

https://www.unicef.org/esa/media/11846/file/Unicef_Zimbabwe_Education_Budget_Brief_2022.pdf

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7.11 ジンバブエ経済と貧困

東京大学前期教養学部理科一類1年 モーチャーン

1. 現在のジンバブエのマクロ経済データ

まずは現在のジンバブエのマクロ経済データを概観していく。ジンバブエの2022年のGDPは207億ドルであり、日本の約4.2兆ドルに比べても大きな差がある。また、岡山市のGDPが約3兆円であるので、岡山市と同程度の経済規模であると考えられる。次に、サブサハラ・アフリカ地域の中でGDPを比較してみると、49国中18位であるが、2000年代以前は南アフリカ・ナイジェリアといった上位の国との差が小さかったが、2000年以降が大きく離れてしまっている。経済成長率を見てみると、2000年代に継続してマイナス成長を続けており、この時期に経済が停滞していた。ジンバブエの一人当たりGDP(ドル建て名目GDP)、一人当たりPPP(ドル建て購買力平価)を見ても同じように2000年代、特に2008～9年に最も低い水準となっている。

2. ジンバブエの政治史の概要

次に、ジンバブエの政治史を概観していく。1965年にイアン・スミスが当時イギリスの自治領であった南ローデシア植民地の独立を宣言するも、白人支配体制が続いたため、ロバート・ムガベ率いるZANU(ジンバブエ・アフリカ民族同盟)などが武力独立闘争に乗り出した。1980年に独立したのち、ムガベは選挙でジンバブエの最大部族であるシヨナ人の支持を集めて大統領に就任し、教育に力を入れた。また、白人による大規模農業の生産が好調で、ジンバブエは「アフリカのパンかご」と呼ばれ、アフリカの中で優等生的な立ち位置であった。しかし、第二次コンゴ戦争への出兵や横領などから国の財政が悪化し、独立闘争により十分な教育を受けられなかった元ゲリラ兵の不満やクーデター未遂などもあり、土地改革へと踏み切ることになった。

この土地改革、通称「ファスト・トラック」では、白人が売り出すと言いつつ黒人は土地を買えなかった状況を打破するため、元ゲリラ兵が白人の土地に次々侵入していった。その結果、白人農家は土地を捨てて国外に逃げるか都市部で再就職することになり、農業インフラ・ノウハウが失われてしまったため、食料の輸出が大幅な輸出に変わり、経済状況の悪化・ハイパーインフレを招くことになった。2008年には、年間インフレ率が157%に到達し、100兆ジンバブエドルが発行されるに至った。その後も依然としてムガベが大統領の地位に就いていたままだったが、ムガベが90代になった2017年、側近のムナンガグワがクーデターを起こし、ジンバブエ独立以後初の政権交代が起こった。しかし、独立以来依然として与党ZANU-PFによる政権が維持されている。

3. 現地での調査方法

現地では大都市内の貧困層や農村部の農民の生活と生活水準を直接視察したり話を伺ったりできる団体へと連絡を取り、ヒアリングを行わせていただいた。WFP(世界食糧計画)はジンバブエオフィスを訪問させていただき、貧困対策の活動についてお話を伺った。実際に貧困地区の支援を行っているNPOのYASD(Young Achievement Sports for Development)では事務所を訪問するだけでなく、実際のプロジェクト実施地で苦しい生活についてお話を伺った。また、JICAの方にはこれらの団体との連絡の段階から大変お世話になったほか、ジンバブエ支所を訪問した際にはJICA専門家の瀬尾チーフなどからジンバブエ農業の現実や日本の農業支援についてお話を伺った。



(左:WFPにてヒアリングを行う様子。右:YASDのプロジェクト実施地でヒアリングを行う様子。)

4. 都市部の生活

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

WFP では、社会福祉の予算が少ないジンバブエ政府に代わって社会福祉の支援や、コロナウィルスのパンデミックに関連する失業者の就労支援などを行っていることをご説明頂いた。これらの支援は現地の NPO を通して行っているとのことだったが、今回我々は YASD という NPO を通して実際のプロジェクト実施地で貧困地区の住民の方にお話を伺い、その生活の様子を知ることが出来た。以下にいくつか箇条書きの形で紹介したい。

- 夫はハラレ市内へ出稼ぎに行き、妻は家の近くの土地で農業をしながら服を内職して売ったりしている
- 都心部へのアクセスが悪いので移動が大変
- 干ばつにより農作物の実りが悪い(当時ジンバブエは雨期であったがほとんど傘を使うことがなかった)
- 子供たちを学校に通わせていない
- ソーラーパネルを YASD の援助で手に入れて、電気を少し使っている
- 都心部では高い教育を受けていないといい仕事に就けないし、低賃金労働はジンバブエドルで支払われるのでインフレにより収入が少なくなり、目先の食料が不安



(写真:我々がヒアリングを行った Hatcliffe 地区の様子。)

5. 農村部の生活

次に、農村部の生活について話す前に、ジンバブエの現在の土地制度について説明したい。政治史の章に書いた通り、2000 年代の土地改革の際に白人大規模農家から土地を(強制的に)没収したため、現在は農業庁が土地を国民全員に分配しており、出稼ぎなどで土地を使わない人は他人に有料で貸したりしている。そのため、大規模に農業を行った方が効率的だが、成長が見込めない、土地の細かい分配を行った方が国民の支持が得られるというジレンマに陥っている。

このようなジンバブエの土地の分配を知ったうえで、一般農家の生産性を上げるための JICA の取り組み、SHEP 研修を紹介したい。(SHEP は Smallholder Horticulture Empowerment and Promotion の略である。)ジンバブエの一般農家の子供は Primary School に 6 年くらいは通えている。(ジンバブエは日本同様 6-3-3 の学制である)しかし、農業について学んだことはなく、市場の情報の使い方や販路を考えることがない。そのため、市場調査・作物選び・作物カレンダー作り・家庭内のジェンダーによる作業の分担などを SHEP 研修を通して自主的にできるよう身につけてもらうことで、効率的で持続的な(再現性の高い)農業ができるように作られている。しかし、SHEP 研修はうまくいかないことも多々あり、

- 市場へのアクセスがあまりに悪い
- 農家間の仲が悪い
- 農家のやる気がない(国境近くに住んでいると国境を越えて出稼ぎする方にコミットしてしまう)
- 土地の貸主の反対

といった原因が挙げられていた。

6. 貨幣について

ここでは話題を少し変えて、ここまで見え隠れしていたインフレの話をしよと思う。ジンバブエでは現在 11 の公定通貨が定められていて、日本円も含まれている。しかし、主に使われているのは米ドル(USD)とジンバブエドル(ZBD)と南アランド(RAND)の 3 種類である。ジンバブエドルは価値の変動が著しいので米ドルを使える人は基本米ドルを使っており、10 ランドはほぼ 0.5 ドルなので、セントが流通していないジンバブエでは使い勝手がいいため部分的に使われている。

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report



(写真:上から米ドル、ジンバブエドル、南アランド。)

ジンバブエの一般的な大手スーパーの PicknPay では毎日米ドルとジンバブエドルと南アランドのレートが掲示されており、ジンバブエドル表記の値札は支払いのタイミングでこのレートで変換される。このレートの変化に注目すると、

- 3/3 16,500ZBD/USD
 - 3/10 18,228ZBD/USD
 - 3/15 約 20,000ZBD/USD
 - 4月上旬 約 30,000ZBD/USD(青年海外協力隊の隊員の方の Instagram より)
- のように変化しており、一か月でジンバブエドルの価値が半分になっていた。

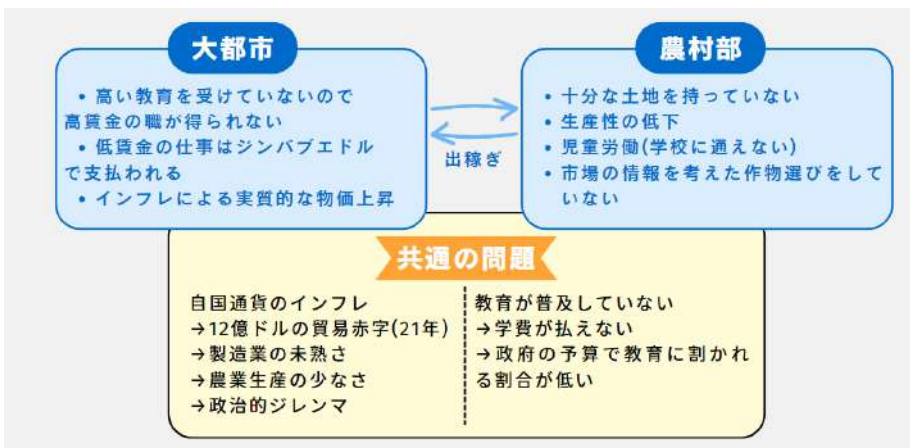


(写真:3/10、PicknPay で掲示されていた両替レート。)

実際、データでも 2024 年 3 月の月間インフレ率は 55.3%であった。一年間の月間インフレ率の変化を見ると、直近 9 か月は月間インフレ率は上昇傾向にあり、政府がジンバブエドルの新しい高額紙幣を発行していない時点でジンバブエドルが取引停止されるのは時間の問題であるように思われていた。その後、4月に入ってジンバブエドルの取引停止と、新貨幣ジンバブエゴールドの取引開始と金本位制への復帰が発表された。(*1)

7. まとめ

ここまで現地でのヒアリングや生活の中での情報をばらばらに書き連ねてきたので、一つの表にまとめて、今後の展望で結ぼうと思う。



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

この表で大都市に書いた問題と農村部に書いた問題は相互に関連している問題ばかりであり、その根底にある問題としてインフレと教育を挙げた。

● 自国通貨のインフレ

ジンバブエドルのインフレは貿易赤字によるところが大きく、2021年には12億ドルもの貿易赤字を計上した。その原因は貧弱な製造業や農業部門の低い生産性が考えられる。製造業の問題は都心部の失業率の問題とも関わっているのだが、製造業の発展は農業部門の発展なくして考えられないので、まずは農業部門の改善が求められる。しかし、ジンバブエでは大規模農業を行うことが政治的に難しく、今後は生産効率の改善が求められていくだろう。

● 教育が普及していない

ジンバブエでは1990年代ごろまで学費が無料であったものの、近年は学費、制服代、教科書代、児童労働などの問題により高等教育まで進む学生が多くはない。このような理由により、表に書いたような貧困のサイクルが続いている現状がある。教育にもっと多くの予算を割いていくことは将来のジンバブエの発展のために必要不可欠であると考えられるし、政府のガバナンスの改善など、まだまだ改善の余地はある。

これらの分析をもとに、これからのジンバブエを考えるうえで次のような点に注目して見ていきたいと思う。私自身も注目していくつもりであるし、この文章をここまで読んでくださった皆さんもジンバブエのことを今後気にかけてもらい、将来いつか実際現地に渡航してもらえれば筆者冥利に尽きる限りである。長い文章になってしまったが、ここまで読んでいただき心から感謝したい。

● 新通貨がどこまで普及するか、インフレを抑えられるか？

金本位制に復帰したものの貿易赤字のため、金準備が持つのか？

● 農業部門の生産の改善は起こるか？

ソーラーパネルなど、最新の技術の導入が進んでいる。AgriTechは現在アフリカでも大きく注目されているジャンルの一つである。

● 政治体制に変化は訪れるのか？

ジンバブエ憲法では3選には改憲が必要なので、ムナンガグワ大統領の3選はあるのか？

【謝辞】

拙い英語しか話せないただの日本の大学生である自分に非常に優しく接していただき、大変貴重な経験をさせていただいた皆さんにこの場を借りて感謝したい。

JICA 古田支所長、木下調査員、Mr.Charlotte、瀬尾さん

WFP Ms.Ifeoma

YASD Mr.Joe

【データ引用元】

アフリカ開発銀行データベース

世界銀行データベース

グローバルノート

世界経済のネタ帳

Statista

Trading Economics

【参考資料】

*1 Zimbabwe launches new gold-backed currency – ZiG(BBC)

<https://www.bbc.com/news/world-africa-68736155>

MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

7. 12 ジンバブエのスポーツ教育

東京大学教養学部理科二類1年 鷲見将太郎

2024年3月にジンバブエに行き、ジンバブエのスポーツ教育について興味を持っていろんな場所を訪問した。その中で知ることのできた、主に3つのスポーツ、野球、サッカー、そして柔道について記したい。

まずは野球について書きたい。ジンバブエでは野球はメジャーなスポーツではない。1980年代までは白人が作った野球協会によりある程度の知名度があったが、黒人になってから不正、横領が多発し、現在では昔と比べて知名度は無くなってしまっている現状である。今回ジンバブエに訪問したことにより、青年海外協力隊の野球の部門で渡航している村田さんにその活動について聞くことができた。村田さんの話で最も印象に残ったのは「あげるつもりで日本から持ってきたグローブを売った」というエピソードだった。ジンバブエに渡航するにあたり、スーツケース半分いっぱいにつまるほどグローブを持って行ったが、無料でそのグローブを配ってしまおうと、日本人は物をくれる人だと勘違いされるだけでなく、そのグローブを転売されてしまうので、そのグローブを売ることでそれらの懸念点を解決して自身のグローブに愛着を持ってもらうことにつなげることができる。そして、今はジンバブエにある6つの代表チームの1つの監督としてチームを強くし、ジンバブエにスタジアムを作ることを目標として活動していることを教えてくれた。

次にサッカーについてだ。サッカー隊員の方に伺った話について書きたい。サッカー隊員の方のお話の中で特に印象に残ったのはまだサッカーを指導できる環境にないということだった。練習場所に行くと毎日のように「金をくれ」と言われる。渡航前は何個もあると聞いていたサッカーボールがなくなっていて、サッカーボール1個だけで40人が練習しなければならない。プロ養成学校に高くはないお金を払って選手は練習をしにきているが、オーナーは私腹を肥やすことで頭がいっぱいであるため設備が整っていない。ジンバブエにプロリーグはあるが、観客がスーパープレーにしか目がいかないため試合として全く面白くはない、などジンバブエ中に普及しているからこそ野球よりもっと根強い問題点があると感じた。

最後に、私がアポイントを取ったジンバブエの柔道について記したい。私は3月にジンバブエに渡航し、柔道に対する日本文化の影響について深い興味を持った。私の大学での武道の経験を背景に、日本大使館を通じてスマート・デケ・ジンバブエ柔道協会会長と接触し、柔道クラスを視察する機会を得た。そこでは、子供たちが日本語の掛け声とともに基本技を練習しており、日本の武道がどれほど尊重されているかを目の当たりにした。スマート・デケ師範は、柔道を通じて礼儀と自己防衛の技術を教え、子供たちの集中力を引き出すために尽力していた。日本からの柔道着寄贈は、経済的な制約がある人々にも柔道を始めるきっかけを提供し、スポーツ外交推進事業の枠組みの中で実施された。私はこの訪問から、柔道がどのように文化的架け橋として機能しているかを学び、その普及活動の重要性を理解した。スマート・デケ師範の話からは、彼の柔道への情熱が伝わり、若い世代への教育への影響が感じられた。柔道の技術だけでなく、その背後にある精神と文化を伝えることの価値を見ることができる非常に意義深い体験だった。

(写真:ジンバブエにて柔道をしている様子)



MPJ Youth 2023 Zimbabwe Study Tour Report

8. おわりに:ジンバブエ研修にまつわる記事のご紹介

当研修では、在日ジンバブエ大使館エニエル・センデライ氏がお繋ぎ下さった、Ministry of Tourism and Hospitality Industry ならびに Zimbabwe Tourism Authority のティナエ・カザンジェ氏をはじめとする皆さまのご厚意で、複数の現地メディアで MPJ Youth 研修について発信させていただきました。過去の研修でも類を見ない貴重な機会をいただいたこと、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

いくつかの記事をこちらで紹介いたします。



Zimbabwe hosts Japanese students on familiarisation tour - Zim Morning Post (Mar 2, 2024)

<https://zimmorningpost.com/zimbabwe-hosts-japanese-students-on-familiarisation-tour/>



Japanese tourists on fam tour of Zimbabwe – Gemnation (Mar 2, 2024)

<https://gemnation.co.zw/japanese-tourists-on-fam-tour-of-zimbabwe/>



Japanese Students Explore Zimbabwe's Wonders | 263Chat (Mar 3, 2024)

<https://www.263chat.com/japanese-students-explore-zimbabwes-wonders/>



Zimbabwe's tourism market in Japan continues to grow as 13 members of MPJ tours major tourist destinations – Spotlight Global News (Mar 4, 2024)

<https://thespotlightnewsglobal.com/2024/03/04/zimbabwes-tourism-market-in-japan-continues-to-grow-as-13-members-of-mpj-tours-major-tourist-destinations/>



ZBC News Online (@ZBCNewsonline) X アカウントのポスト (Mar 17, 2024)

<https://x.com/ZBCNewsonline/status/1769316650401124451>

なお、MPJ Youth の公式 SNS、HP でも研修時の様子を掲載しております。よろしければご覧ください。



MPJ Youth

*_**

Email : mpj.youth16@gmail.com

HP : <https://www.mpjyouth-official.com/>

X (旧 Twitter) : @mpj_youth

Instagram : @mpj.youth

*_**